325-114
21119

# WHY DO I BELIEVE IN JESUS CHRIST?

Rev. R. B. Girdlestone, M.A.

川崎市藏譯

# 基督教信仰論

普光社

明治
43. 6. 10
内交

# WHY DO I BELIEVE IN JESUS CHRIST?

BY THE

Rev. R. B. Girdlestone, M.A.

TRANSLATED

BY

I. Kawasaki.

Published with the assistance of a grant from
The Society for Promoting Christian Knowledge
And under the direction of the Committee of
The Japan Church Literature Fund.

THE FUKOSHA
1, Ogawamachi, Kanda,
Tokyo.

## PREFACE

These Addresses were delivered in the Centenary Hall, Bishopsgate Street during April and May, 1904, to business and professional men. They are intended to give a bird's-eye view of Reasons for believing in Christ. They aim at presenting the positive side of Truth rather than at discussing objections. They offer stepping-stones across the stream of doubt, not a short and easy method of silencing doubtors. Though necessarily condenced, they are the results of much thought and reading, philosophical, scientific, and historical, carried on during the last half century. It is hoped that they may prove helpful, not only to the readers, but to others through them.

Perhaps I ought to add that they were delivered from notes in a colloquial, and rather unconventional style, and are by no means Academic treatices.

R. B. G.

Wimbledon, June, 1904.

# 緒言

本書は余が本年四五月の候倫敦市に於て實業家會社員醫師學校教員等の爲めになせる講演を筆記したるものにして、余がキリストを信仰する理由を概論せるものなり。されば反對者を辯駁せんとせるものにあらずして、眞の道を如何に信ずべきかを示せるものなり。又疑ふ者を沈默せしめんとせるものにあらずして、彼れ等の手引とならんが爲めに講演したるものなり。所論は極めて簡單なれども、之れ余が過去五十年間に哲學科學歴史等を渉獵して得たる知識に余の思索を加へたるものなれば、單に讀者諸君を裨益するのみならず、讀者以外の者にも亦諸君より余の所論を紹介せられんことを切望するものなり。

尙ほ余は一言を附け加へざるべからず、是れ堂々たる學術的論說にあらずして、寧ろ平凡卑近なる講演集なることを。

西暦千九百四年六月　ウキンブルドンに於て

アール、ビー、ガードルストーン

# 目次


第一回　自然界の大書籍及び其の讀者と著者　一頁

一　自然界、その統一秩序及び適合　一頁

二　人類以上のものと人類以下のものとに相關する人類　六頁

三　吾人の自然界より聚めし神の啓示　十頁

四　不可思議論は自然界の諸問題を解釋せず　十六頁

第一回　講演追錄　十八頁

第二回　聖書　その年代、內容、神託及び感化力　二十二頁

一　聖書とは何ぞや　二十二頁

二　新約全書の年代　二十五頁

三　舊約全書の年代　二十七頁
四　舊約全書の歴史的價値　三十二頁
五　イスラエルの外的歴史　三十四頁
六　イスラエルの内的歴史　四十頁
七　新約全書の歴史的特性　四十二頁
八　新約全書筆者の公平　四十三頁
九　聖書の正確なることは言語上よりも立證すること　四十四頁
十　パレスチナの風土記　四十七頁
十一　聖書の神學　四十七頁
十二　聖書は即ち天啓なり　五十頁
十三　聖書の神託　五十二頁
十四　聖書の感化力　五十八頁
第三回　キリストの使命　彼れが齎せる證據　彼れの使命を證する大事蹟
一　約說　六十三頁
二　人類の墮落　六十三頁
三　救の希望　六十四頁
四　キリストに對する準備　六十八頁
五　洗禮（バプチスマ）の日ハネ　七十一頁
六　イエスは來れり　七十四頁
七　キリストの偉業　七十六頁
八　キリストの布教　七十八頁
九　キリストの性格　八十頁

十　イエスの豫言を果し給ふた事　八十六頁
十一　彼の復活　八十七頁
十二　キリストの神性　九十一頁
十三　全体から見た彼の使命　九十七頁
第四回　初代及び現代の基督教徒に對する聖靈の働き　百十三頁
一　推論餘考　百十三頁
二　聖靈の約束　百十五頁
三　ペンテコステの恩惠　百十六頁
四　使徒の説教　百十八頁
五　新生涯　百十三頁
第五回　ペテロにつきて　百十六頁
六　パウロにつきて　百十九頁



八　基督教會の建設　百二十一頁
九　福音と羅馬帝國　百二十二頁
十　特長ある基督教々義　百二十六頁
十一　キリスト現今の勢力　百二十七頁
十二　得らるべき例　百三十三頁
十三　外國傳道事業　百三十七頁
十四　内地事業　百四十一頁
十五　決論　百四十四頁

# 基督教信仰論

## 第一回　自然界の大書籍、及び其讀者と著者、

其の一、自然界。

その統一、秩序及び適合。

基督教といへば既に神を信仰する宗教なることは何人も知らるることでありまして、その教義によりますと神が其の子イエスキリストを此の世に御遣しになつて此の世と和合なされたのでございます、又キリストを死より蘇らせました、と申します、使徒等が説教を爲されました初代の集會も既に神を信仰せるものの集會でありました、又パウロが異教徒に説教を爲されました時にもパウロは其の聽衆が

皆多少の有神的思想を有つて居る者としてその說敎を始めたのであります、私共も亦同樣の考を念頭に置きまして此の研究を始めたいと思ひます。

さて、神といふものは眼に見えないものであります、併し眼に見えないものは、眼に見える所の中間物によりまして之を觀破することが出來ます、即ち神といふものは其爲す所の行爲によりまして知ることが出來ませう、私共が引力說やエーテルなどを信ずるのもやはり同樣に其の基礎は單純なものでありますが併し之とても綿密な觀察やら實驗から歸納されたのであります、從て眞の有神論者は先づ第一に自然界といふ大書籍を說明しなければなりません、此の書物は非常に大部なものでありまして又多くの卷數から成り立つて居るものでございます、先づその第一を此の地球と致しませうか、私共は地球の形体とか重量とか又は運動とか地殼を組立てゝ居る物質などに就ては多少の知識を有つて居りますが、又自然と其の表面の事には親しくなりまして水陸の分布やら土地の高低やら又は大氣、降雨、蒸發、引力、粘着性、その他の日常の法則をば漸次に熟知する樣になるものであります、地球上の物質や運動に次ぎまして私共が學ぶべきその第二章は植物の發生、成長及び其の變種であります、更にその第三章は動物の生命でありまして、之等の諸章は實に私共を眩惑させるものであります、或科學者が申されました通りに各創造物の研究には實に一生涯の勞力を費しても足らない位でございます、一片の蘚苔、土筆、樫の實、胡蝶、卵、脈管、筋肉、骨、神經、眼球、及び腦髓等にはまだ〳〵解らぬ澤山の神秘があるのであります。

第二卷は地球の衛星たる月の研究でありまして第三卷は太陽、第四卷は太陽系、第五卷及び其の他の諸卷は宇宙星辰界の事實でありまして未だ曾て開卷せられたことがないのでございます。

併し乍ら神は何處に居られるのでございますませうか、私共は未だ神の居らるゝ所に達しないのでございます、然るに幾度も注意して此の自然界といふ大書籍を精讀いたしましたならば如何いふ事が了解て參りませうか。物質界の廣大無邊な事、及宇宙全体に行き渡つて居りまする渾沌否整然たる秩序、系統、又は形体、色彩、釣合、及音響上の美、或は鑛物、植物、動物の變態、或は此の變態中より科學者が發見いたしました其の共通點等が了解て參りませう、近頃になりまして殊に多くの事柄が明かになつて參りました、例へば物質の相關力が初めて說明され、スペクトラム分析によつて地球と天体との物質的關係が示され、比較解剖などが日常の話柄となり、動物界と植物界との類推法が明瞭となり、古生物學者が或種の動物は人類の生存以前より繼續して居ることを說明し、又胚胎學者及び顯微鏡學者が受胎作用や成長作用の法則を示されましてからまだ漸く五十年でありますが斯樣にいたしまして自然界の全系統は過去も現在も地上も天上も等しく一全体より出て參りました多くの部分なることが明瞭となつたのでございます。

更に精細に自然界を研究いたしますと、適合の意義や、目的に對する方法の調整作用や、播種、受胎、成長等の諸作用中に現はれて居りまする機巧や、動物界植物界の同格なることや、小目的は大目的に從屬することや、無限の勢力を調停してその過剰を防ぐ作用などが明かに了解されるのでございます。

**其の二、**　人類以上の物と人類以下の物とに相關する人類、

自然界の大書籍を精讀して得たる印象をば極めて簡單に述べて參りましたが一体何物が斯る大著述を精讀したのでございませうか、云ふまでもなく其れは人であります、人は自然界の一部分であり乍ら自分を自然界の外に置いて之を研究することが出來るのでございます。

私共が自分の身体を研究して見ましても人は自然系統の一分子でありまして、其の肉体を組織して居りまする物質は嘗て過去の年代にこの地球が創造されました物質と關係があるのでございます、又人類は動物及び植物を食物として居りますが其の身体の構造、血液の循環、呼吸、運動の方法、五官、神經、腦髓等から申しますと矢張動物界の一員たるを免かれないのであります。

又人類は其の構造上決して動物中の最大、最強、最速、最長壽者でもなければ又最強なる嗅覺を有つて居るものでもございません蜘蛛の網一つ、鷦鷯の巣一つだも極く眞に近く模造することは出來ないのでございます。又他動物の樣に生れ乍らに衣服を着けたり、又鴨の樣に泳いたり、鷲の樣に飛んだりすることも出來ません、況してキャミリオンの樣に外界の狀況に應じて其の保護色などを表はすことは繪具の力でも借りなければ到底出來ないのであります。

斯樣な欠陷がありましても人類は自ら萬物の靈長なりなどといふて居りますが之は人類が生理的に不具な所を、心靈的に補はれて居るからであります。斯くして人類は鑛物、植物、動物三界の王となつたのであります。萬物が皆人類に奉仕して居りますのは之人類が

理性を有するからであります。實に吾々人類は四圍の外界に對して智的趣味を有つて居りまして、之を觀察し、之を研究し、之を記述しまして、終には之を概括し、又決定するのであります。斯くして自然界に對しては歩行する所の註釋者となつたのであります、自然界の縮寫圖は實に人類の腦中にあるのでございます。而も人類は常に想像、先見、集注、結合、構成、管理等の諸能力を働かして居ります、諸君が人類の何たるかを知らんとするならば、先づ其の爲し得る事を考へて御覽なさい、中繼器、汽關、汽船、寺院、都會、新聞、電話、實驗室、病院などは是れ皆人類の造れるものであります。

又人間の語るのを御聞きなさい、其の舌端の運動は寧ろ亂雜であるのにも係らず、不思議なる哉、その人類獨特の言語を更に筆を以て發表して居るではありませんか、一体かやうな秘訣は何處にあるのでございませうか、之れは疑もなく人類は只物質や身体上の必要物にのみ依らないで精神的に概括、抽象、觀念等の諸作用を働かして一種契合的の發音を爲す能力があるからであります。萬物を、構成して居りまする原素の數は七十でありますが言語を組成して居る發音も亦七十種でございます。而して凡そ三十箇の文字を以て之を表はすことが出來ます、諸君は圖書館内を歩む時に斯の如きことを想起されたことがございませうか。

先づ一の個人を研究して御覽なさい、其は必ずしもソクラテス、アリストートル、ベーコン、シエークスピア、子ルソン、ウエリントン、の如き偉人豪傑たるを要しません、諸君御自身で結構です、諸君の始原、成長、教育、五官、特長、實力、技術、音樂、意思、怜悧、記憶、及び道義心、思考力、感情、希望、目的、恐怖、等を研究し、

又他人に對してその幸福を祈るなどの天性をも研究し、記述し、熟考して御覽なさい、之れが即ち此の自然界といふ大書籍を讀む所の人間であります、

## 其の三

吾人が自然界より聚めし神の啓示

若し人類が自然界といふ書物の讀者でありまするならば、誰がその書物の著者でありませうか。語を換へて云へば誰が自然界（人類をも包含する）の作者でありませうか。

假りに自然界の作者があると致しませうか、その起原、又はその創作者が存在するのでせうか。

若し私共が宇宙外の或る一點から此の自然界を觀察しまして、之が丸で死塊の樣に變化もなく生命もなき平地であつたならば、私共は初めも終もないものだらうと考へるかも知れません、又此の自然界の秩序が固定した車輪の樣に廻つて居て、萬物が皆之に倣つてくるくるとまはつて居るとするならば、矢張り初も終も無いものだと斷定するのでございませうが、私共の觀察する物質界も星辰界も決して斯樣なものではありません、又私共は吾々人間の肉体について考へて見ましても私共は只その起原を考へる計りでなく、どうしてもその創造主を考へずには居られません、何となれば人を造れるものは必ず人類よりも偉大なるもので、其の性格は丸で吾々の性格と異つて居るに相違ないからであります、プラトー及び其の他の昔の哲學者は、思想家の所謂第一原因については只僅に聲援を與へた位でありましたが、「家屋は人の造りしものにして萬物を造りしものは神なり」、といふ定說には双手を揚げて贊成したのでありませう。

此の問題を考へるにつきまして、私共が注意すべきことは萬物の起原は何であるかといふことであります。詳言すれば

一、形態種々なる物質、その組成分子、原素及釣合、

二、物質の作用を調整する勢力、例へば雷氣、光、熱、化學作用及重力、

三、同一原因は必ず同一結果を生ずる整然たる秩序、

四、植物の生命、成長、變種、

五、動物の生命、

六、道德心及其の他の精神作用、過去の歴史等を有せる人類、

であります。觀察や思考から信仰に入ることは別に困難なことではございません、私共は此の世に生存する以上は必ず自分自身の事よりして自然界の研究に取りかゝるものであります、意思の力や筋肉の力で自然界の勢力が想像されます。又日常の法則からして自然界の大法則が解る樣になるのであります。其の他私共が常に向上し準備し、目的を立て、手段を講じ、臨機應變の所置など爲す所からして此の自然界に豫想、適合、希望等の諸作用が働いて居るといふことが推究されるのであります、斯樣な理由でありますから、私共は類推上どうしても此の自然界の大書籍は或る者の著述せるものなりといふ決論に到着するのであります。

有名な大哲學者デカルトが嘗て申しました、「自然は神を秘し、人は之を啓く」と、之れは實に至言であります、私共が内外の事物を仔細に研究いたしますと自然に有神論者となるのであります。自然界の統合一致によりまして私共は神が唯一体あると云ふことが信せられます。吾々人間の人格並に精神作用が源となりまして、神の人格

並に神の精神作用に流れ注いで居ります、自然界の廣大なることや美はしいことや、秩序のあることは皆神の榮光あることを示すものでありますし、それでありますから正を正とし惡を惡とする吾々の道德心も亦神から降るものと信ぜられます。

之れは純然たる神人同性說でありますが、私共は敢て此の說を耻とするものではありません。人類は超人に至るの階梯でありまして自己及外界の存在を信ずるのみならず、或意味に於ては人類と關係深き萬物の創造主にして又維持者たる神を信ずる樣に造られたのであります。創造主の事業は實に廣大無邊であります、其の計畫は到底人類などの企て及ぶ所ではありません、實に神の意思といふものは人間の精神作用や腕力で之を如何ともすることは出來ないのであります、私共が精鋭を盡して漸くに果すことも彼に取つては極めて容易に出來るのであります、又私共が全心全力を盡してなすことも神は只一の精神作用によりて爲さるゝのであります。又私共は天より附與せられし事物に依賴して事を爲しますが、神は全く知識正義及神聖なる希望にのみよりて、絕對獨立に之れを爲さるゝのであります。之れはパウロの詞として彼の同胞アラトスの讃美歌、「吾等は神の子孫なり、」といふ歌の中によく現はれて居ります、即ち私共は樹木の樣に生命その他のものを全く神に依賴して居る計りでなく吾々の性格と神の性格との間には恰も親子の關係があるのであります。そこで或人は彼を不可思議と呼び、或人は至善を求むる常住の力と云ひ、又或人は之れを正義の力なりと申しますが、私共は今一歩進んで彼を父と呼ばうではありませんか、

**其の四、**　不可思議論は自然界の諸問題を解釋せず、

思想家は上に述べて參りました眞の有神論に代るべき種々の學說を案出いたしました。運命、機會、必然、及び自發等を說いた無神論もあります、此等の論者は皆人格といふものを見落して居りますけれども、人類が人格的なる限りは物質界の背後にも亦一種の人格あることを認めずには居られないものであります。又萬有神論といふものがありまして萬物皆神なりと論じて居りますが、論者は吾々と吾々の行爲とを區別しなかつたのであります。又多神論もありますが、今日の樣に自然界の秩序が明かに統一されました時には別段に論ずる所も無い樣であります。又アゼンスの神殿に祭られてある無名神の神体に刻まれてある稱號を借り來つて、不可思議論を唱道する一派がありますが論者はその位置の困難なるを認め、自己の愚なるを覺り、何事にも決論に到達すべき論據なきことを說きて終に神は考ふべからざるものなりといふ定說に避難したのであります。私共は不可思議論者に對して何と答へて善いか、實に其の答へる所を知らないのであります、假りに私共が神の性質、思想感情及其の事業などを全く不可解なものと致しましても、神の存在を假定せずに吾人々類をも有せる此の自然界を解釋說明しようとすることは非常な困難でござりませう。人類は種々の欠陷を有し、出來心を有するに拘はらず、畢竟するに「神は在り」といふ確信を有つて居るものであります。

使徒パウロの言は、此の不可思議論に對して最も有功なる治療劑でございませう、曰はく

「吾汝等に傳へんとする所のものは汝等が知らずして拜する神に外ならず」と、斯樣にしてパウロは、有神論の第一原理より其の聽衆を基督敎に導いたのであります。自然界の啓示はキリストによりて私共にも示されました、實にキリストの敎訓中には自然界といふ大書籍の秘密もあれば、讀者案内もあり、又著者の默示もあるのであります。

されど私共は神の要求するものを考へる以前に、先づ神の使命を研究するに最も確實なる、他の書籍に注意を向けなければなりません。

## 第一回　講演追錄

私は只今此處で科學者の著述二三について御參考までに申し上げたいと思ひます、科學界の泰斗たるバルフオア、スチユアート氏及びテイト氏が今から三十年程以前に「未知の宇宙」と云ふ著述を爲されましたが、其の所說は今日も尙精密に研究すべき價値のあるものであります、其の第五十四節に

「吾人は萬物の創造者たる神の存在を絕對自明の眞理と假定して先づ筆を起さむ」

と述べられてあります。又ハーバート、スペンサー氏の著「第一原理」中にある一節を引照しまして、

「吾人は總ての現象を見て私かに想ふ、是れ或者が吾人に及ぼす力の表示なりと、されど吾人の經驗は到底此等の現象を解釋すること能はざれば、假令全知全能の力は考へ得べからざるものとするも、此の力の存在が果して那邊迄なるかをも亦知ること能はず、又科學の批判も此の力を以て到底不可解なるものとせり」

と記されました。

次に私は故アージル侯の著はされました、有益にして又興味ある書籍「自然界の統一」を御紹介致しませう、侯は常識に富める熱心な科學者でございました、其の書物の中には自然界の統一について種々興味ある論説を述べられ、且つ自然界の目的については面白く説明されてあります。

最後に私は之れも科學界の泰斗たるサー、ジョージ、ストーク教授の自然神學を引照致しませう。之は千八百九十一年並に千八百九十三年にエヂンバラ大學で講演されたものでありまして、科學と自然神學との關係を述べたものであります。氏は天地の創造、破滅、キリストの使命、奇蹟等の問題を忌憚なく論ぜられまして「形体上の進化論は決して宇宙間の現象、人類界の事實を説明し得るものにあらず」と斷言せられました。其の第二卷には第一卷に於けるよりも尚一層自由に又精細に論説せられまして、單に氏が自然界に關する意見を吐露せられたばかりでなく、又其の創造主及び主權者たる神に關する意見をも發表せられましたのは、實に氏の勞を多とするのでございます。

# 第二回　聖書、其年代、内容、神託及感化力。

## 其の一、聖書とは何ぞや、

信者諸君の熟知せらるゝ詩篇第十九章は有神論に筆を起し、進んで聖書に説き及ぼしてありますが、之れは私共に正しい研究法を示して居ります。従つて私共は先に有神論を詮議して參りました、（引照――もろ〳〵の天は神の榮光を現し穹蒼はそのみ手のわざなり、）而して此の自然界の現象中に力、目的、及統一あることを認めました。此の三原素は人類によりて認めらるゝものでありまして、人類は又其の第一原因たる神と自然界とを結合する連鎖の一つであります。それでありますから此の世の中には、

一、人類以下のもの
二、人類
三、人類以上のもの

の三階級があるのであります。斯樣にして自然界は人類に依つて解釋せられ、又人類は少くとも或程度までは神をも解釋するものであると云はれるのでございます。即ち自然界は神を秘し、人は之を啓くのであります。

次に私は聖書と申します神の第二の教科書につきて申上げようと思ひますが、第一講演の折に、全世界を一冊として自然界といふ大教科書を用ゐました後ですから、掌ほどの小冊子に諸君の思想を集注するのも何だか馬鹿〳〵しい樣ではありますけれども、此の中には多大の眞理が包含せられて居るのであります。數日前の新聞紙に十年

間研究の結果として、新原素三氏を得たといふ記事が載つて居りましたが、此の三氏は目下世界中で又と無い唯一の原素ださうでございます。それでありますから總て物事は其の大小によつて評價することは到底出來ないのであります。從つて此の聖書の價値も實に百萬の地球にも比敵すべきものであらうと思ひます。扨て聖書は如何いふものであるかといふに、丁度小圖書館の樣なものであります。即ち六十六卷を一冊子としてありますが、年代から申しますと最古のものと最新のものとの間には少くも千五百年の間隔があるのでございます。又其の記述者の數は少くとも四十名に達して、種々の職業及階級の人々より成り立つて居りますが、而も其の殆んど全部は猶太人であります。即ち聖書は土地と人類とを同じくせる多くの人々に記されたるものでありますから、其の内容は多方面なるにも拘はらず、或程度までは互に一致して居る處がございます。此の點に於て聖書は他の經典と大にその趣を異にして居りますから、私共は非常な興味を以て研究するのでございます。

## 其の二、新約全書の年代

聖書の年代如何は實に大問題であります。私は先づ逆及的に新約全書の年代を考證しようと思ひます。私共が今日使用して居りまする聖書の原本即グリーク聖書は一体何時頃のものでございませうか、之れは千五百十六年にエラスマスが初めて出版したものでありまして、其の年代は左程古くはございませんが、其の最も古い原稿中の現存せるものには、三百五十年頃のものがございます。併し新約全書の使徒や豫言者の年代は尚三百年の昔であります。最後の記述者

も既に死亡したと思はるゝ紀元百年より三百五十年に至る二百五十年間は如何でございましたらうか、蓋し此の時代の人々はその當時湮滅せし最古の原稿を窺ふことが出來たのでございます。三百〇三年に羅馬皇帝デオクレチアンは、聖書を燒き捨てよとの命令を發しまして、多數の原稿を失ひましたが、矢張り神の攝理によりまして此等の古き原稿を用ゐました人々の手元には、尙多くの原稿が秘藏されて居つたのでございます。

彼の有名なるヘールス公（サー、ディヴィド、ダルリンプル）は或る時食卓上で次の如き問題の提議されたのを聞かれたさうでございます。

「若し現存せる聖書を全滅せば、紀元後第三世紀に至るまでの基督教書類を以て、新約全書を再編するは不可能事なるべきか。」

即ち公は此の提案に從つて再編に取りかゝりましたが、正確なる參考史料の豐富なると、天賦の文才とはよく一二ケ月間のうちに新約全書中八節を除くの外、全部を初代教父の書籍中より引照されたといふことでございます。其れ故に若し私共が之を再編する方法順序に熟して居りましたならば、初代の基督教書類を參考して之を再編することが出來ることと思ひます。

斯樣に新約全書の年代及び其の正鵠なることを知らうと致しますれは、私共は現代より初期の印刷時代に溯り更に初代教父の使用せし原稿に及び、最後にはその起原第一世紀に到着することが出來るのであります。

## 其の三、舊約全書の年代、

さて舊約全書の方は如何でありますかと申しますに、ヘブリユ語

にて記されたる古き原稿は、不幸にして今日に傳はらないのであります。此の原本が傳はらないで、其のギリシヤ語に飜譯されたものが吾々に傳はつたといふことは寧ろ失望すべきことでございます。併し事實上今日に至るも猶太教は尙存在して基督教と同一の舊約聖書を用ゐて居ります。之れは今日ばかりでなくキリスト時代から用ゐて來たのであります。でありますから私共がキリスト時代に逆りますならば、兩派とも同一宗教であつたと云ふことが分ります。即ち一言に申し上ぐれば猶太教の經典は基督教の舊約全書でありまして、基督教が猶太教から分れました當時は、兩派とも其の經典の內容は全然同一であつたのでございます。其の他若し私共がキリスト時代パウロ時代、ジョセフス時代、又彼の有名なる猶太人フヒロ時代に生存するものと假定いたしましたならば、私共は此等の人々が舊約聖書の諸卷中より、幾多の引照を爲すを見るのでございませう。實に新約全書中には、六百に垂んとする舊約聖書の引照があるのでございます。フヒロ及ジョセフスは共に舊約聖書に關して或る意見を述べられましたが、殊にジョセフスの所論は明確にして首尾一貫したものでございます。又舊約聖書中の所謂「隱れたる經典」と稱せらるゝものの中には、紀元前二百五十年頃に記されたものもあります。此等のものは多くの諸卷と同樣に、普通は三部に區分されるのであります。即ち法律、豫言、及その他の諸卷となります。此れは古代猶太聖書の分類法でありまして、私共が用ゐて居りまする今日の聖書とはその順序は違ひますが、其の內容は畢竟同一であります、第一はモーセの五書と申しまする法律でありまして、第二は約書亞記、士師記、路得記、撒母耳書、列王紀畧等の豫言書であります。太古此等の諸

卷は初代豫言書と呼ばれまして、今日私共の所謂豫言書は後の豫言書と稱へられましたのでございます。第三は聖書と呼ばれました諸卷でありまして、約百記、詩篇、箴言でございます。傳道書、但以理書等は所謂他の書類に屬するものであります。此の書類の最後の卷は歴代志畧でございますが、此れは猶太民族の俘囚後の書物と見做されたゝ爲めであります。斯樣にして私共は猶太人が如何にして舊約聖書を觀察したかを知ると同時に、又舊約聖書が百五十年以内に完成せられし事實をも追究することが出來るのであります。

諸君は或は私共が今日何故に尚古代に溯ることが出來ぬのであらうかと云ふ質問を發せられるかも存じませんが、其の出來ないといふ理由は極めて簡單であります。何せなれば今や其の所以を問ふべき當時の編者も筆者も生存せず、又其の作物も既に湮滅して更に頼る所がないからであります。舊約中に散見する所に依れば古代には、幾多のヘブリウ作家、編年史作者等があつたのでありますが、彼等の作物は皆年と共に消滅して、殘るは只聖書のみとなつたのでございます。

私は更に一言を附け加へますが、諸君が若し舊約聖書中の最新の卷なる尼希米亞記及馬拉基書より御研究を始められましたならば、諸君は引照に依つて最古の卷に到達することが出來ます。之れは後々の筆者が皆モーセの法律及豫言者の詞等を屢々引用したからであります。即ち諸君はダビデに到り、ヨシユアに到り、モーセに到ることが出來ます。斯樣にいたしましたならば、舊約聖書各卷の比較年代を知ることが出來るのでございます。私は後代の筆者が如何樣にして、先代筆者の手に成れる諸卷を使用せしかを聖書中に記入しました

ら實に結構なことであらうと屢々思つて居ります。後代の筆者が先代筆者の語句を引用せることは明かなことでありまして、實は私も自身の研究には、青色インキを以て其の箇所々々に記入を試みました。でありますから、例へば私が只今創世記の第一章を聞いて居りましても、某の句は某の筆者が引用して居るといふことが分ります。其の他の諸卷を開いても同樣でございます。此の通りに各諸卷はそれ〴〵相關聯して居りますから、私共は上述の方法によりまして、所謂イスラエル人の聖典史なるものを編纂することが出來ることと思ひます。

## 其の四、舊約全書の歴史的價値

私は更に進んで此等諸卷の特質を論じようと思ひますが、先づ其の第一の特質は諸卷とも歴史的に編纂されてあることでございます。即ち第一卷は第二卷に、第二卷は第三卷に漸次相繼續して創世記、出埃及記より降て尼希米亞記に至る迄は、實に秩序整然たる編年体に編纂されてあります。只歴代志畧の如きは大部分列王紀畧及其の他の諸卷と重複せる處がありますけれども、其の他の者は皆連續一貫せる書物でありますから之れは今日までに傳へられました史料中第一の歴史的連鎖であります。此の大史籍中には又二大事實が認められるのであります。即ち各歴史は内的なるか外的なるかでございます。此處に私が内的と申しますのは一國民間の歴史でありまして、外的とは他國民との間の歴史であります。英國史を以て説明いたしますればウオタールーの戰爭は佛國と關係がありましたから外的であります。又彼の改革案通過の如きは他の國民とは何等の關係もあ

りませんから之は内的でございます。斯の如くに聖書中イスラエル人と他國民との交通接觸の歴史は外的でありまして、イスラエル人間の制度、詩歌、傳記等は皆内的であります。

**其の五、**イスラエルの外的歴史、

私共が他の方面より蒐集した史料と此の聖書中の外的歴史とを比較對照することは實に必要なことであります、かやうにして私共はイスラエル民族の建設者と他の民族との關係も聖書によりて明かに知ることが出來ます。例へば彼の最も重要にして而も躍如たる創世紀第十二章に於てアブラハムがカルデヤのウルより出でゝ其の民と共にメソポタミヤの北部なるハランに旅行し、尋いで道を西南に取り、パレスチナまで前進せる記事がありますが、之れに依りましてアブラハムの歴史はカルデヤに始つて居るといふことが分ります、更に次の二章には東方に於てエラム人やメソポタミヤ人などがカナン人と戰爭せしことが記されてあります、第十四章に記されたる諸王は他の史料中にある諸王と果して符合するかどうかと云ふ疑問が起ります、即ち該章にあるアムラペルとかエラザルの王アリオクとか其の他ケダラヲメル等は抑も如何なる人物でありましたらうか。英國博物館にハムラビの半面像がありますが、東洋史家の説によりますと之れは不思議にも彼のアムラペルと同一人物であると云ふことであります。之れは近世發見中の最も興味あるものであると思ひます。此等の事柄に注意しつゝ聖書を愛讀することは、最も大切なことでありまして、創世紀の第十四章を歴史的でないなどと云つて居る人々は非常な時勢遲れの人であります。近頃英米二國に於てアム

ラベル法典といふものゝ出版がありますが、之れによつて考へまするのに彼れは決して野蠻の惡王では無かつたのであります。或學者などは彼の法典がモーゼの法律以上であるといふ樣に書いて居ります。彼の法典はモーゼの其れよりもずつと古いものでありますが、古いからといつて信用が出來ないといふ理由はないのであります。此の法典は黑い石の上に刻まれてありまして、又アムラベルが眞の神否太陽の神から之を受け取る所の像をも刻まれてあります。私は人々が太陽を禮拜せしことをば敢て不思議に思はないのであります。之れは自然でありませう、若し私共でも何か物質界の或物を禮拜すると致しますれば、當然吾々に取つて最も有用な太陽を禮拜するのでありませう。併し乍ら聖書は此れ以上の事を私共に敎へるのであります。即ちモーゼの法律にも太陽を作りし神を禮拜せよといふことがあります。創世記第一章の神即天地萬物の創造主なる神は、私共がモーゼの法律と稱する正しき法律をモーゼに告げし神に外ならぬのであります。併し只今はアブラハムが如何にして他國民と接觸せしか、又其の事實が如何に英國博物館に於て證明されて居るかを申し上ぐるのでありました。

イスラエル民族が古代に於て、幾多の他國民と接觸せし事實は、是れ實に興味ある問題であります。今日に於ても世界中英國人を除けば最も多くの他國民と接觸して居る人種は、此のイスラエル民族であります。之れは實に著明なる現象でありまして、是非諸君の一考を煩はしたいものであります

聖書に記されて居りまする諸王中にはアッシリヤ王プル、チグラトピレセル、シャルマネセル、サルゴン、セナケリブ、エザルハドン、エジプト

王シシャク、ゼラー、ネコ、ホプラ、シリア王ベンハダッド、ハザエル、バビロニア王メロダクバラダン、ネブカドネザル、ベルシャザル、ベルシャ王キルス、ダリユウス、クセルクセス、アルタクセルクセス等がありますが、何れも造詣深き東洋學者によりまして、其の紀念碑に記されたる文字より直接に其の生存せしことを證明されたのであります。併し以前には其の中の或王などは聖書記述者の信仰上虚構せる者だらうなどと考へられて居つた者もあります。例へばサルゴンは以賽亞書二十章以外他の如何なる歴史中にも現はれて居ない人物でありますから、不信仰な人々は「サルゴンとは一体誰のことですか」などと云つて聖書研究者を嘲つたのであります。又聖書研究者の方でも不明であつたものですから、仕方なしに「恐くは他の人物の異名だらう」などと申して居りました。然るに先年殁せられた英國人ヘンリー、レイヤード氏はチグリス河畔の古跡コルサバッドに於てサルゴンの銘ある大肖像を發見されたのであります。其の後又東洋學者がサルゴンの言行録を發見いたしましたから、今日では何人もサルゴンとは誰の事ですかなどと云ふ愚問を發するものはありません。

其の後又「ベルシャザルとは誰なりや」といふ難問が提出されました。之れは彼の名が唯一回但以理書に記されてある計りで他の古文書には絶えて現はれて居らないからであります。之れに對しても亦私共は答へる所を知りません。私一個人としては解りません、知りませんで通して居りましたが、或る學者の如きは恐く他の人物の異名だらうなどといふ説を立てゝ居つた方もありました。つひ數年前ベルシャザルの事跡も發見されましたから、今や聖書中不明の人物は殆んど皆無となりました。若し未だ不正確な點があるとすれば、

其はメデヤ人ダリユウスでございませうが、之とても最早や充分信憑すべき幾多の理由があるのであります。

## 其の六、イスラエルの内的歴史、

一國の歴史を内的の史料及地理によつて相對照しますれば、其の事實は益々正鵠を得たものとなります。蓋し諸君は「外的歴史によりて信ずべくんば内的歴史の正確なることは明かなることなり」と承認せられる筈だからでムいます。是れ外的歴史は内的史實にのみよりては知ることが出來ないからであります。彼の全英國を殆んど二分いたしましたる改革案は、果して何れの國の歴史に詳かでありませうか。總て内的事件は外的證據を造ることが少いものであります。故に舊約聖書中に現はれたる内的歴史は他の外的歴史によつて愈々其の正確の度を強うするのであります。

されど私は此處に聖書筆者の公平無私なりしことにつきて一言致さうと存じます。一体何れの國何れの民も自國の敗北を其儘に記載するものは極めて稀なことでございます。必ず之を修飾して或は全然反對の勝利としますか、又は天變地異に歸するか、或は全然之を抹殺するのが通常の人情であらうと思ひます。然るに聖書の筆者は此の點に關して極めて正直に記載してあります。即その敗北或は零落を明記して人々の惡德又は不信仰に歸してあります。例へば創世記第十三章にアブラハムが其の妻を妹なりと僞りて、非常な恥辱を被むれるなどは一例でありますが、其の他の事實に就ても全聖史を通じて頗る正確に記されてあります。

**其の七、** 新約全書の歴史的特性

私共が舊約聖書から新約聖書に移りますと其の趣が非常に違つて居ることが分ります。是れ舊約聖書はアブラハム時代即ち紀元前凡そ二千年より紀元前四百年に至る凡そ千六百年間の歴史でありますが新約の方は只一世一代の物語であるからでございます。聖ヨハネはキリストの小兒時代に生れたものでありまして一番長生を致しましたから、新約全書全部の出來事は皆彼が一生涯中に起つたものと見るも大した相違は無からうかと存じます。舊新兩聖書は斯樣に相違して居りますけれども、新約の方にも亦内的及外的の歴史がありますのでございます。何故と申しますに、同書中にはカイザルヘロデ、ポンテオピラト其の他祭司長有司及敎法師ガマリエル、又外國都市の代官ガリヨ（哲學者セネカと兄弟）なども現はれて居ります。又福音書や使徒行傳に現はれて居りまする人名其の他の固有名は何人が造つたのでもありません。例へばテサロケ市の有司の稱號などは當時該市の或市街に建てられたる城門に記されてあつたのでございます。只今は英國博物館に陳列してあると思ひますが、其の後テサロニケには戰亂がありましたから、若し此の博物館に收容しなかつたら、或は滅亡に歸したかも知れません。斯樣に新約の外的歴史も亦舊約の其れの如く幾らも其の證據を擧ぐることが出來ます。

**其の八、** 新約全書筆者の公平

叙事の正確公平なるは新約全書に於ても舊約全書と同樣でございます。使徒時代に於て最も有名なる信者はペテロでありましたが、

四福音書中何れもペテロに就て悲むべき物語を記してあります、即ちペテロは主イエスの擒はれし時三度イエスを知らずと云ひし記事が載つて居ります。私は此の福音書の樣に正直公平に記された歴史は決して他に見ることが出來ないと思ひます。

次に私共は此の新約全書の諸卷は多くの他の記錄又は覺書などから撰擇されたものであるといふことを記憶せなければなりません。舊約全書の方にも所謂年代記の樣なものはありませんが新約に於ても年代を追うて記載編纂せるものは更に少いのであります。此の年代順序を等適當に按排して聖史と通俗史とを比較しその年代を記入するは是れ歴史家の本務であると思ひます。

**其の九、**聖書の正確なることは言語上よりも立證することを得



私は次に聖書の史蹟に對する言語上よりの立證は更に一層信を置くべきものであると思ひます。即ち聖書を記せる言語は直に其の眞僞を證明して居るのでございます。何故なれば舊約全書を記したるヘブリユ語は其の時代時代の方言とも云ふべきものでございますから、若し私共が充分の注意を以て言語學上から研究いたしましたならば、各卷の比較年代等が一層明かになるのでございませう。此の點に關しては從來何人も充分の研究を爲されて居らない樣ですが、各卷の言語には格段の相違があると云ふことは事實であります、イスラエル民族が他の國民と接觸しました時代には、其の地方的慣習又は言語が勢ひ聖書筆者の記述材料となつた事は明かであります。丁度今日此のロンドン市のピショップゲイト附近で猶太語が話され

て居ります様に、昔も方々で此の一種不可思議なる猶太語が話されたのでございます、例へばイスラエル人がエジプトに在りし時代には自然多數のエジプト語を混用したのであります。踰越節の物語中に見えまするアビブといふエジプト語は元と綠なる嫩き草といふ意味でありましたが、之れを月の名前と致して居つたのでございます。然るに此の語は後に廢語となりまして、該月名はアッシリア又はカルデア語原にて全然意味を異にせるニサンと呼ばれる様になりました、このアビブなる語はイスラエル人がエジプトに居つたといふ事を明に證明するものであります。次に又モアブの平野にありしバラム及バラクの物語中に記されたる、「然ば請ふ汝今來りて我ために此の民を呪へ」といふ句がありますが、此の「呪へ」といふ語は只バラムがイスラエル人を呪つた場合にのみ特別に用ゐられた様でございます、此の語はモアブ語であるといふことが何時か證明せらるゝことと思ひます、之れと同様にシリヤ、カルデア、ペルシヤ及ギリシヤ語等が諸所に記されて居ります

## 其の十、パレスチナの風土記

聖書に記されてありまするパレチスナの地形や風土につきましては、既に多くの旅行家探險家の實地踏査によりまして、今日では明かになつて居ります。殊に諸君の中にも既に親しくその土地を御見物になつた方々があると思ひますから、私は茲に贅言を致しません。

## 其の十一、聖書の神學

私は更に聖書中に一貫せる他の一要素に就て一言しなければなり

ません、之れは彼の歴史的要素と密接の關係あるものでありまして、即ち神學的要素でございます。先づ創世記の第一章には神の天地創造が記されてあります。尋いで神は常に聖書の中心となりまして、歴史の神聖を保つて居ります。神の目的、契約、攝理等は實に驚くべき有様に現はれて居ります。

試みに創世記第十二章を開いて見ますならば、是亦實に驚くべき歴史上の轉回點でありまして、諸君は一老人が神の攝理によつてその郷里より此の新中心國に導き出されまして、神より三契約を結ばれしことが記されてあります。即ち第一は其の邦土に關して、「我汝に此の全地を與へん」と約され、第二は其の一族に對して、「我汝を大なる國民と成さん」と約され、第三は其の一族の各員に對して、「天下の諸宗族汝の子孫によりて福祉を獲ん」と約束せられました。

此の三契約は眞實なるものでありますから、舊約聖書の自餘は總て神が如何に此の契約を實行されましたかを記せるものと見ても差支はありません。即ち「汝の子孫によりて」といふ詞はイサクに及びヤコブに及び其の子孫の增加するに從ひまして、恩惠は終に各國民に及んだのでございます。斯様に聖書は明かに世界的聖書であります。之れは創世記の初めに於て最も著しく示されて居ります。アブラハムに至りまして稍狹義となつた様でありますが、「汝の子孫によりて地の總ての民は幸福なるべし」と約されましたのは、尙世界的ではありませんか。此れ等の諸章は實に全世界の憲法でありますから黄色人種も白色人種も黑色人種も銅色人種も等しく此の憲法を指して、「此處に吾等の總てに對する神の契約あり、吾等は此に適せんが爲めにキリストに入るなり」、といふのであります。

## 其の十二、聖書は即ち天啓なり

私共は屢々聖書は天啓なりと申しますが、之は即ち神の目的、契約及攝理を示せるものであるからであります。神は二方面（第三方面に就ては後に述べますが）から其の存在を私共に示されて居ります。即ち神の曰ふ所及神の爲す處の二方面に依つて其の存在が分ります。出埃及記第三十四章に神は自ら其の性格を說かれて六ヶ條を擧げてありますが、私共が此の性格を體して全聖史を讀みますならば、神は寬大、親切、慈悲、恩惠、等をその性格となされて居りますが、而も人の些細な罪をも判かるゝのであります。之れが即ち聖書研究に入るの階梯でありまして、私共が研究するに從つて之は神の自啓であるといふことが分ります。私共が注意して聖書を研究すれば、する程、益聖書には神が現はれて居ることが分ります。即ち自然界の神も歷史上の神も明かに現はれて居ります、又神は如何に此の種族と交通されましたか、因果應報や祈禱の効力や罪の懺悔とは果して如何いふことであるかといふことが了解されます。又よし私共が神を尋ね求めなくとも、神は常に私共を尋ね求めて恰も羊牧者がさまよひ出でたる羊を尋ねるが如くに惠を垂れ給ふことが分ります。

私共が舊約全書を讀み終ります時は、何時も次には何が來るだらうかといふ念に打たれます。扨て愈新約全書に入りますと第一にはキリストの一代記を記せる四福音書、第二には基督敎會の初め第三には使徒よりの書簡がありまして些々たる一小冊子でありますが、實に貴いものであります。丁度小さい芥子種の樣でありますが、其

の成長する時には空の鳥をも宿す樣になるのでございます。

## 其の十三、聖書の神託

私は尙進んで最後に聖書の神託及その感化力に就て暫く述べて見ようと思ひます、先づ此の比類なき諸卷は一體如何して完成したのでありませうか。幾多の筆者が意識的に書かれたのでありませうか。否無意識的に斯る大結果が生れのであります。之れは丁度大本山の樣なものでありまして其の境内は第一頁に開拓されてあります。又其の基礎は創世記に於て築かれ本堂はモーセの代に造られたのであります。而して殘餘はダビデや歷代の諸王に依つて大成されたのであります。其の後にキリストや使徒等が之に棟石を据ゑて愈完全のものと致しました。此れ等の作者經營者は恐らくは斯樣な大結果を來さうとは思はなかつたのでありませう。實に立派な作物ではありませんか。一體誰が斯る計畫、斯る目的を立てたのでございませうか、私は前にペブル人に送られた書簡の一節を引照しまして、

凡そ家は之を建れるものあり、萬物を造れるものは神なり。

と申しました又此の自然界にも大目的あることを述べましたが、今又此の聖書の中にも一貫せる目的約束攝理等が現はれて居ることを述べようと思ふのでございます。

往々人は神と人類が交通會談せることを否定しようとする樣でありますが、私は若し神人の會談が無かつたならば、却て不思議なこと丶思ひます。神人の關係が若しも神と人類以下のものとの關係よりも親密でありましたならば神が天降つて人類と會談すること別段

に不思議なことでは無いと私は思ひます。若し神が斯様にしなかつたならば、却つて不思議ではありませんか。神に父の様な性格がありまして又私共の父たる性格も神から出たと致しますれば、神人の交通は寧ろ自然の事であらうと思はれます。然らば私共は何故に今少しく頻繁に又完全に私共の祖先なる神と交通が出來ないのでございませうか。之れが却て奇跡でございます。私は次に其理由を述べて見ようと存じます。

先づ神が如何なる方法で人類と交通せるかを考へて見ますならば別に其の方法として文書を用ゐましたわけではありません。自然界といふ様な大書籍を用ゐられたのであります。其れでありますから直接に所謂書籍といふ様なものは無かつたのであります。即ち聖書の如き大書籍を給はるには次の様な順序方法を取られたのでありま

す。

第一　記述者の撰定

第二　記述事項の委託

第三　託宣によりて正當なる事項を記述せしむ

即ち幾多の記述者が神意を記しましたのは、全くその託宣に依られたのであります。私は只今斯る大体の話から細目に入らうとは思ひませんが、神が人に大任を下さうとする時には、先づ其の人に之を果すべき力を與へるものであります。此の力は即ち感興（インスピレーション）であります、故に神命によつて語り又は記さんとするものは、全く神の託宣を其の儘に吐露するのでありますが、併し其の題目を考へ其の適當なる言語を工夫したのは明かであります。又託宣は必ずしも創作といふ意味ではありませんから、記述者が以士喇書尼希米亞記等にあ

る様に他の多くの書籍から抜萃して記述することもあるのでございます。斯様に記述者は先代の書籍を參考とし、又は其の時代の知識を利用することが出來ますけれども、注意すべきことは諸事項中最も重要なる神の性格の如き事柄に就ては、勉めて誤謬に陷らぬ様にすることであります。又神よりの託宣中には、一種上昇力ともいふべき力を與へられまして、一層廣き眼界を示されることがございます。諸君も屢々此の廣濶なる眼界中にて記されし聖句を認められるのでありませう。例へばパウロの言に

「今より後義の冕わが爲に備あり、主即ち正しき審判を爲すもの其の日に至りて之を我に與ふ」

とありますが神託は尚彼を上昇せしめて、

「唯我に與ふるのみならず凡て彼の顯はるゝを慕ふものにも與ふべし」

と述べさせましたが、之れは彼の使命をして更に一層普汎的ならしめたのであります。又聖ヨハネはキリストにつき述べて曰ふのに、

「彼は吾等の罪の挽回の祭物なり」

と。然るに神託は尚彼を高い所に上げまして、

「第に吾等の爲のみならず、偏く世の爲の挽回の供物なり」

と云はしめました。即ち神託は此贖罪につきましても、唯一個の教會に限らないで全世界の人々の贖罪を示されたのであります。又洗禮のヨハネがキリストを指して「世の罪を任ふ神の羔を觀よ」と云はれましたが、此處に罪とありますのは彼の罪にもあらず、イスラエル人の罪にもあらず、全世界の人々の罪であります。又豫言者イザヤは其の書第五十三章に記して、

「われらは皆羊の如く迷ひておのゝ〳〵己が道にむかひゆけり然るにエホバはわれら總てのものゝ不義を彼の上に置きたまへり、」と言はれましたが、此等は只神託によりて記されし二三の例に過ぎません。

## 其の十四　聖書の感化力

さて私は愈々最後の論點たる聖書の實際上の感化力に到着いたしました。此の感化力は神託と共存して常に靈感し、又靈感されつゝあるものであります。聖書の健全なる筆調及び其の力、其の純潔なること、神に對する尊敬は之實に世の光、地の鹽となりました所以でありまして、決して區々たる門派的のものではありません。私は屢新聞紙上で教育問題中に聖書の信頼すべからざるものゝ如くに論せられてあるのを見まして、甚だ迷惑に感じたことがあります。聖書は實に世界に對する偉大なる賜物であります。故に私共は彼の聖書會社と共に、「汝は何派なるや」といふ問を發するの必要はありません。聖書會社は常に宣言して、「聖書を要するものは之れを讀むべし、要せざるものも亦之を讀むべし」と呼號して居ります。かくて聖書は今や四百の國語に飜譯せられまして、天下のあらゆる人種に提供されました、之れは全く靈感に依れるに外ならぬことゝ信じます。聖書は實に世界的聖書でありまして、獨り英國教會の占有物ではありません。又一教會一國民一時代の占有物でもありません。あらゆる小兒の物語書たると同時に又あらゆる大人の生涯欠くべからざる經典であります。

然るに聖書は今日までに幾多の迫害を經て參りました。小刀を取

つて一ヘブライ人を切り、之を火中に投せしエホヤキムが、果して最初の迫害者なりしか否かは疑はしいけれども、彼れは確かに最後の迫害者ではございません。聖書は今日まで種々の迫害を經て參りまして、實に悲壯なる歴史を持つて居るのであります。されど此等の迫害者に對する私共の答は何處までも、「吾等は聖書を傳播せしめむと欲するものなり」との確答でなければなりません。パウロの時も亦斯くの如くでありました。近くチンダルの時代に當時のロンドン僧正は新約聖書を買ひ集めて之を燒かしめたことがあります。然るにチンダル又之を賣りたる金錢を以て新しく聖書を印刷いたしました、何故に聖書を燒きしかといへば是れ主として聖書中に記されたる罪の告發、審判、及極端なる平等主義に歸因するものであると思ひます。富者も貧者も等しく此の書中に集つてエホバは萬人の主となり裁判官となつて居ります。又金錢にても名譽にても或は其の他の賜物にても買ふことの出來ぬものがあります。全世界の人々は何故に速かに此れを探究しないのでありませうか。又聖書は誤謬、罪惡等に對して極力之に反對いたしますから、從つて斯る謬說を爲すものには好まれないのであります。

余は最後に尙一言しようと思ひます。諸君は此の簡單廣濶なる概論によりまして、諸君の有する寶玉の何たるかを御了解になりましたらう。諸君は果してよく之を利用されて居られますか。諸君は既に之を有して之を讀み祈禱と勞力とによりて之を研究しようと致されるのでありませう。私は今二つの研究法を申上げやうと思ひます。即ち第一は今研究しつゝある處をば聖書の他の部分によりて解釋する方法でありまして、之れは聖書に統一があるからであります。第

二はキリストを研究の手引とすることであります。是れ旧約全書は彼に至り新約全書は彼に始まるからであります。私は諸君が斯くの如くにして常にキリストに導かれんことを切に希望するものであります。

# 第三回　キリストの使命、彼が齎らせる證據、彼の使命を證する大事跡

## 其の一、約説

私は之れまで數回の講演を致しましたから最早今日私共の前に横はれる大問題を説くべき道は充分に開かれて居ると思ひます。私が、最初に自然界の大教科書を用ゐて次に聖書に移りましたのは、寧ろ迂遠な方法で結極最初から單刀直入の方法を取つた方が宜しかつたかに御考へに爲る方もありましたらうが、御互に思想が異なれば方法も亦異なるものでございます。私が信仰の困難や事實研究の必要を感じましてから既に五十年になりますが、私は其の間に斯樣な方

法で人々を導かうといふ考になりました。若し此の方法が最捷路でないとするも私は畢竟最良の方法であちんことを希望いたします。再言すれば私共は第一に人類をも有する此の自然界を教科書といたしまして、第二には聖書といふ大教科書に入りました。がその内的方面も外的方面も共に歴史的であるといふことを説明いたしました。又互に靈感し、靈感されつゝあるといふことを信ずべき充分の理由を述べましたのでございます。

## 其の二、人類の惰落

かの驚くべき聖書の目的は何でございませうか。經緯となつて之を織り出したものは何でございませうか。創世記第三章は子供の御伽話の様ではありますが、私共は此處に人類の弱點及現實の苦しさが現はされて居ると思ひます。又同章には人類の種族に就いても說き初めてありますが、此の二事實は私共が全体を解釋する上に於て、第一の手引となるのでございます。一体人間の爲た事は一般に聖書には罪としてありますが、ヘブリユ語ギリシヤ語では此の罪といふ語の觀念が一種特別の意味を有つて居るのでございます。即ち「正鵠を誤る」とか又は「過失」とかいふ意味でございます。ヘブリユ人やギリシヤ人が斯様な考を有つて居つたことは著しい事實でございます。一体人類には到達すべき一定の目的があるものでございまして、創世記の第一章にも

「我等の像の如く我等人を造り」

云々とあるも確かに此の寓意でありまして、吾々が神の様に行爲すべきことは最初から人間生存の大目的であつたのでございます。而

して罪と申しますのは此の目的に達する直き道から離れ遠ざかることで、即ち正鵠を誤ることであります。私共の祖先は丁度子供の樣でございましたから神は之を試みて其の柔順其の正直を試驗されましたが、御存じの通り私共の祖先は落第したのでございます。併し乍ら其の失敗は幸にも内心から出たのでなくして、外界から誘起されるのでございますから、私共は之れに對して感謝しなければなりません。即ち其の誘惑物又は惡魔と稱するものは外界の實在物でありまして、罪といふものは其の初私共の祖先から自發したものではありません。若し人間が孤獨でありまして何者よりも誘惑を受けないとすれば又如何なる罪も犯さないのであります。之れ人性の善なる所以であります。併し乍ら敵は虛に乘じて襲來するものでありますから、聖書中には到る處に其の事が記されてあります。惡魔といふ語は原と敵といふ意味でございまして、人類は此の敵の陰謀に陷つては道を離れて罪を犯すのであります。「世には何故にかゝる惡魔あるか」と問はれるかも知れませんが、聖書は殆んど答を與へて居りませんから、私共も知ることは出來ませんが、之れは多くの事柄を解釋するものでありますから、後程申上げようと思ひます。

私共の祖先は第一回の試驗に落第しましたが、其の結果は如何でありませう。是れ彼等は不柔順不信賴になりまして、神に到るよりも寧ろ隱れて安全を求めようとしたのでございます。此れが所謂疏遠主義でございまして、其の思想は其祖先の一世一代に止まらないで久しく遺傳したのでございます。今日よく云ふ所の遺傳說といふものは聖書に於ては著しくありますが、之れは正道を離れて惡に傾かんとする精神が、代々傳はつて來たのであります。併しアダム、

エバが罪を犯せる後も尙ほ此の世に罪の生涯を續けることを許されたるのみならず、全人類の祖先となりまして其の罪を子孫にまで遺傳したと云ふことは、全聖書中の最大不思議でありまして、私は新約全書の全燈明を以てするも充分に私共の道を照すことが出來ないと思ひます。然れども神は自らその解釋者となられるでございませう。

## 其の三、救の希望

聖書は人類の弱點或は欠點たる罪の事實を記載すると同時に又神が如何に此れを所置するかを記してあります。

即ち第一裁判、第二慈悲に依つて之を所置したのであります。裁判は直に開かれまして、アダムもエバも又誘惑を爲せる惡魔も、皆神の前に召喚せられたのでございます。而して其の刑罰として各々に耻辱、苦痛、悲哀、排斥、破壞、死亡を課しました。之れは罰の方面でありますが、又一方では慈悲、裁判の喜、來らんとする救、希望等の樂觀的方面もありました。

希望の戸開くと共に、創世記第三章は閉ぢまして、第四章となります。アダムとエバはエデンの花園より放逐されまして最早や此の樂園に入ることは出來ませんでしたが、彼等は尙ほケラビムと焰の劍とにて守れる此の樂園を見て、幾度か憧がれたのでございませう。第四章に記されたる供物は必ず多くの人の模範となつたに相違ないでございませうが、之れも亦此の樂園の入口に供へられたのでせう。其の當時も或意味に於て神はケラビムと共に住はれたのでございます。而して此の思想は降つて猶太人の會堂又は神殿にも移植された

のであります。かやうに最初から神に近くあてはありましたが劍が其の門を守つて居りますから、之れに到るの道は充分でなかつたのであります。

聖書の初めは斯くの如きものでありまして、之れは又全書に入るの門でございます。其の他の諸卷には多く神の救ひの方法が記されてあります。神は如何にして彼の大なる世の救を果されたのでありませうか。神は諸君の所謂仲介者によりて之を果さうと爲されたのであります。吾々人間の力は實に偉大なものではありますけれども、斯くの如き事は決して人間の業では出來ません。人間以上の者を必要としたのでございます。私共は大抵の事は出來ますけれども、此の事のみは出來ないのであります。又私共が天より附與されました諸能力も、よく惡魔に打ち勝ちて私共を神に歸せしむることが出來ないのであります。

それでありますから私共の必要とする所は人間以上の實在即ち神によりての救であります。從つて神に信賴する爲には太古アブラハム時代以前より仲介者といふものがありました。而してモーゼ、ヨシユア、士師、ダビデ等の人々が此の任務に就かれた事實が聖史中に行き渡つて居ります。

## 其の四、基督に對する準備

幾多の歳月を經過しまして漸く大事業を爲すべき基礎が出來上りました。此の基礎は三要素から成り立つて居ります。第一は歴史的並に神學的要素でございます。私共の主イエスが此の世に降臨せられました時には既に舊約全書と神學とがございました。主が此れを

基礎として其の大業を起されました事は、新約全書中に認めらるゝ事實でございます。第二は豫言的要素でありまして、救世主の降臨及彼の事業、彼の迫害等を豫言せるものでありますが、此れは丁度小供の積木の樣なものでございまして、彼方此方非常に複雜して居りますから、直讀直解することが出來ないものでございます。併し唯一人之を總合して明かにしたものがあります。此れは云ふまでもなく天より降りてその豫言を完成されたお方でございます。第三は儀式的要素でありまして、神は時滿てる時自ら行はむとせし儀式を屢々説明されたのでございます。

## イスラエル人の宗教的儀式を研究して見ますと、

最初には極めて鎖細に見えることでも其れが後日の豫言となつて居りますことは實に興味あることであります。例へば出埃及記第十二章第四十六節に、「其の骨の一をも折るべからず」と記されてありますが、是れは踰越の節に小羊を屠れる儀式でございました。然るに千四百年後十字架に懸けられました三人のうち兵卒は其の兩側に懸けられた罪人の脛を折りまして、次に中央に懸けられた人の脛をも折らうといたしましたが、最早や死んで居りましたから、脛を折らないで戈を以て其の脅を刺したといふ豫言に相當するのでございます。此の事實を證言せるものは、是れ二大豫言の果されたるものであると説明して居ります。即ち一は前述の踰越の節の儀式に、「其の骨の一をも折るべからず」と記されたることであり、第二は撒加利亞書第十二章第十節に、「彼等の刺しゝ者を彼等見るべし」と記されてある豫言でございます。此等の事は互に千年の歳月を隔てゝ豫言されてありますが、之れを十字架上のキリストと對照して彼此相考へて見ましたならば、神が如何にして其の大

計畫を豫言に歴史に示されたかと云ふことが分ります。

## 其の五　洗禮のヨハネ

舊約全書の卷末より新約全書に至る四百年間は、是れアブラハム以來繼續して參りました神人の關係が斷絶した時代でございます。併し乍ら私は斯樣な斷絶がありましたとは思はれません。兎に角此の四百年が經過しまして新約時代となりますと、忽ち刺叭の音は國中に響き渡りました。是れ即ち洗禮のヨハネの聲でありました。彼は實に聖史中の偉人でありまして、自らを聲と呼んで居りました。即ち「野に呼べる人の聲あり」と記されてあります。彼は三大使命を果さん爲めに來つたのでございます。其の第一は「主の道を備へよ」でございます。諸君は此處に主といへるは以賽亞書に於て、イスラエルの王「主エホバの道を備へよ」と記されたる如く、エホバなることが御分りになりませう。今は王は降つて其の國を建てんとして居るのでございます。第二は「世の罪を任ふ神の子羊を見よ」と云れたることであります。此處に世の罪と申しますのは、唯ユダヤ人の罪のみではありません、全世界の罪であります。創世記の第十二章に「天下の諸〳〵の族汝によりて福禮を獲ん」と約束せられましたことが思ひ起されます。又「罪を任ふ」の「罪」とは不善にして「任ふ」といふのは希望といふ意味でございます。過去幾百年は實に此の希望に憧がれて居つたのでありますが、終にその希望を滿すべき贖罪者が參つたのでございます。而して洗禮のヨハネは彼に就いて證言したのであります。第三は「彼は聖靈を以て汝等に洗禮を施すべし」と豫言せる事實でございます。即ち彼がユダヤの開地を拓いてキリ

ストの降臨に對して道を備へし方法でございますが、其の當時は何人も斯ることを豫期しなかつたのであります。否ヨハネ自身すらも充分に之を知らなかつたのでございませう。彼は所謂「聲」となりて野に叫べる者でありますから、其の云ふ所及其の豫言によりて果さるゝ事の眞意を確知して居つたのではありません。未來は當時の人々にも未知であつた樣に彼に取つても亦未知であつたのでございます。つまり彼は唯神の使命を果す爲めに召された豫言者であつたのでございます。

## 其の六

イエスは來れり、

彼の降臨に就いて錄されてあります通りに、愈々時は滿ちてイエス、キリストは參りました。即ちエルサレムの南六哩ばかりなる一寒村に誕生せられたのでございます。此處はダビデの生地でありまして、又キリストは其の貴き系圖につながれるものでありましたが、其の家は貧しいものでございました。而も厩の中で生れなされたことは、實に此の世の王として適はしくありませんが、是れ却つて彼の使命を明かに示されたものであります。キリストが紀元後二十五年頃に公けに爲されました事蹟の最初の一つは殿堂を清めたことでございます。彼が此の事を爲しますと人々は直に、「汝此の事を爲すからには吾等に如何なる休徵を示すや」と云ひまして、互にキリストの權威を詰問いたしました。斯くの如き詰問に對しまして主イエスは其の證據を示すの必要を感ぜられたのでございます。私は本講演に於てこの證據とは果して如何なるものであつたかと云ふことを申上げようと思ひます。

## 其の七　キリストの偉業

今假りに諸君がキリスト時代に生存せるガリラヤ人であるといたしませう。而して俄にキリストが殿堂より諸商人を追ひはらつたといふ報知に接して走せ來り、

「汝は如何なる權威ありや」、

「汝此の事を爲すからには吾等に何の休徴を示すや」

と互に詰問せるものと假定いたしませう。其の時最も諸君の注意を引くものは、恐くはキリストの爲せる此の偉大なる行爲でありませう。ギリシヤ語の聖書には彼の偉業を三語にて示してあります。即ち、

力、（勢力發動の意）　奇蹟（不可思議なる行爲）

休徴、（彼の偉業は神よりの使命なることを示す標）

でありまして、此等の三語は彼の大實在を美しく示して居るものでございます。或人は奇蹟を目して自然法に反するものといたしますが、聖書中には決して斯る見解はありません。一體此れは人々の自然觀如何に依るものでございまして、或人は自然界を狹く見て「自然界とは吾人が廿世紀の知識にて知り得る全部なり」と申しますが、或者は廣く見て、「自然界は吾人が疑議する所のものよりも一層廣大なるものにして、廿一世紀以後に至りて開かるゝ秘密をも藏する所のものなり」と申します。又或者は「吾々が自然界の眞想を知悉せざるうちに科學上の最後の用語は案出せらるゝに相違なし」と申しますが、一體私共が此の最後の用語に果して達するでありませうか。科學は常に從來の見解を捨てゝ進歩發達して居りますから、私共は

現に自己が何處に存在して居るかも解らない位であります。であります。ますから或る時代の醫書は次ぎの時代に於ては全く不用となりますやうに、他の諸科學に於ても或る程度までは全く異なる見解を下すやうになるものであります。それ故に私共が今日キリストの偉業が自然界の法則に反するか否かを論ずる事は全く徒事であります。然れどキリストが人間以上であつたと云ふ事は、彼の爲せし奇蹟に由つて知る事が出來ます。凡そ此世の存在物には次ぎの三階級があります。

一、人類以下
二、人類
三、人類以上

キリストは此の第三階級なる人類以上の世界に生存せられて、彼の偉大なる事業を爲されたのであります。故に諸君が彼の奇蹟、休徴に付て記されたる事を御覽になりますならば、彼れは如何なる事にも少しも當惑せず又窮迫せずして、何事も悠々として公然之を爲されてしかも誤らなかつたと云ふ事がお解かりになります。のみならず彼れの爲せし事は皆最も著名な事でありまして、神の使命を示して居ります。即ち病人を治せし事、救ひ、警戒、及び教訓等は其の重なるものであります。

## 其の八　キリストの布教

我等の主イエスの第二の證據は彼の布教せしことであります。私は主イエスが四十回程も「師よ」と呼ばれしことがギリシヤ聖書に記されてあるのを見ましたが、不幸にして此の語は屢々 master と英

譯されてあります。ギリシヤ語の Dipascotos は即ち教師といふ意味でありまして、ヘブリユ語のラビに相當するのでございます。暫くの間ではございましたが主イエスは會堂、跡傍、街上、或は屋内等至る所で布教傳道されたのであります。彼の復活後マグダラのマリアはイエスを認めましてラボニと云はれましたが、之れを解けば「我が師よ」といふ意味でございます。彼女は正しく「我が教師は再來せり」と思つたのでございませう。

キリストの教訓は實に平易でありましたが、同時に能く人を感動せしめ、其の内容は實に純粹周到にして而も權威あるものでございました。其の說く所は極めて深刻でありまして、能く聽衆の心膽を碎いて或は千仞の谷底より天上の高きにいたし、或は九天の高きより那落の底に落す如く人心を動かしたのであります。例へば一稅吏とパリサイ人との譬諭を讀みましても、片言隻語生氣に滿ちて、各節自ら一幅の好圖畫を見るが如き感を起さしめるのでありませんか。今日の大神學者の學說中にも到底此の一片の譬へ話に比敵すべきものはございません。

## 其の九、キリストの性格

主イエスの第三の證據は彼の性格であります。第一彼は何を爲したか。第二何を敎へたか。第三彼は何者（彼の性格如何）なるか私が今述べんとするは此の第三問題であります。畢竟するに私共の言語動作は皆私共の思想感情より發するものでありますけれども、此れ等のものは私共の枝葉でありまして、其の本幹たる吾人其のものではありません。

諸君がキリストの性格を御研究になりますならば、必ず反對せる二大卓越性が相一致して居ることが御わかりになりませう。是れ即ち彼の特性でありまして、多くの學者の認めたる所であります。例へば彼は一方に於て非常に純潔な方でありましたが、又他方に於ては非常な同情者でありました。純潔性といふものは往々にして氷山の如く氷結せるものでありますけれども、主イエスに於ては氷塊なき純潔性を認められるのでございます。即ち温き同情心、柔和なる感情が融和されて居るのではありませんか。又彼は神事に關して絶對に献身的でありましたが、而も極めて靜穩沈着で何事にも激せられた樣なことはありません。從つて私共が主イエスの性格を研究すればする程益々其の偉大なことが解りまして、到底常人の規矩を以て計ることは出來ないのでございます。

實に吾人は主イエスが其の性格に於ては一點の非難を打つべき汚點のないと云ふことを忘れてはなりません。彼は實に清淨潔白な性格を供へて居られましたから、多くの人類中に於て悔ひ改めを要せざる唯一人の御方でございました。その將に死の門に立たれし時も、又ゲッセマヂの園に於て全身を献げて天父に祈られし時にも、彼れはその過去に於て一言の悔悟を要すべき行爲の無かつたと云ふことを示して居ります。その祈は現在に就いての祈で、過去に關する祈ではありませんでした。私共の過去を省みますならば、幾多の悔い改めを要すべきことがありますのに、主イエスに於ては少しも恥づべきことが無かつたのであります。彼は嘗て人々に對して、

「汝等の中誰かよく我を罪に定むる者ある乎」

との問を發せられた位でございます。キリストの純潔無垢であつた

ことは彼の性格中の大特性であります。かの希伯來書中に記されてある如く、彼は實に「罪人に遠かりたる」人でございました。即ち彼と普通人との間には非常な間隔があつたのでございます。又彼は決して、「吾等は罪人なり」と云はれたことがありません。此れは彼自身をも包含せる語であるからであります。彼の愛した人々や、招いた人々や。又共に座して飲食された人々と彼との間には、實に道德的精神的間隔があつたのでございます。是れ私共が彼の人格を論ずるに當つて特に留意すべきことでございます。彼は實に日光の如く此の放逸にして疏んぜられたる世を照して、完全なる愛の光を天父と人類とに等しく及ぼされたのでございます。

## 其の十、イエスの豫言を果し給ふたこと

第四の證據は舊約全書中に記されたる豫言を果されたことであります、當時のユダヤ人は主イエスがベテレヘムに生れたことを餘り知りませんでしたから、此れは多少の妨げになりました。又豫言の書中には主の生涯に關して記したものが少く、寧ろ多くは彼の死復活及其の後に來るべき榮光に就いてのみ記されてありますから、彼はその生涯中常に舊約全書を引照されまして、「聖書を見よ、是れ我に就きて證するものなり」と云はれましたのにも拘はらず、彼の復活後までは舊約の豫言に就いて人々は多く探索を試みなかつたのでございます。

## 其の十一、彼の復活

第五の證據はキリストが死から蘇つたことであります。曾て「汝

此等のことを爲すからには、吾等に如何なる休徴を示すや」と人々より詰問されたまふた「汝等此の殿堂を毀て、我三日にて之を建てん」と答へられましたは確に其の身体の殿堂を指されたのでございます。

キリスト復活の性質及び其の證據に就いては、ミリガン教授の講演並に書類會社出版に係る故ケンデー博士の著されたる小冊子に詳論されてあります。私はバーシガードナー教授の著されたる「福音書探索」中に記してありまする難問題に就いて精細なる研究を致しましたが、同教授は事實の性質及び考證に就いて誤解されて居る樣でございます。何人も主イエスが復活せられました時の現狀を見たものはありませんでしたが、是れ復活なるものは靈化的なるものであるからであります。されども復活後多くの人々は彼れを見て公然其の事實を證明したのではありませんか。かの有名なる歴史家アーノルド博士は、曾て「豫言者ヨナの休徴につきて」説教されましたが、其の一節中に「余は年來その事跡に就いて記されたる人々の證據及び他の年代史の研究考證に勉めて居りましたが、神がキリストを死より蘇生せしめて吾人の偉大なる休徴を與へられました事實の樣に、あらゆる點に於て完全なる證據をば未だ人類の歴史中に見出さないのでございます、」と申されました。

右の他に尚二つの證據がありまする。一は次の講演にて申上げようとする「聖靈を以て洗禮を施す」ことでありまして、今一つはキリストの再來でございます。此の再來がありましたならば總ての疑念も難問題も皆明かに解釋せられるのであります。

此れ等七つの證據は當然吾等の主イエスキリストに歸すべきもの

でございます。今之れを一括して見ますと

一、キリストの偉業
二、キリストの布教
三、キリストの性格
四、舊約の豫言を果したこと
五、キリストの復活
六、聖靈を注ぐこと
七、キリストの再來

となります之れ即ちキリストの使命を明示する七大證據でございます。

今假りに私共が其の時代に成長せる猶太人であつて舊約全書に親み、洗禮のヨハネの說敎を聞き、尙イエスキリストと數日間の會合をなしましたならば、「吾等はメシヤ即ち約束せられたる主を見出したり」と云つたのでございませう。が、私共は此れが聖書に記されたるメシアであると說明して貰はなければ中々分らなかつたでございませう。舊約全書は實に彼の降臨に備へられたるものでありまして、當時と雖思想深き猶太人は直にキリストのメシアなることを認めたのでございませう。即ち、「吾等はメシアを見出せり」と云ふよりも、寧ろ反對に「メシアは吾等を見出せり」と云ふ方がよろしうございませう。

## 其の十二、キリストの神性

吾人は尙一歩を進めて、「彼は如何なる生存者なりしか」を究めんといたしますが、之れには彼のサウルがダビデに對して「汝は誰の

子なりや」と申しまして「汝は誰なりや」と云はざりし例に習はざるを得ないのであります。キリストは果した誰の子でございましたらうか、私共は聖書中に於て彼は三つの名を以て呼ばれて居るのを見出します。即ち第一人の子、第二ダビデの子、第三神の子、と此の三とほりに呼ばれて居ります。第一の人の子につきましては少しも疑はございません。全く彼は肉体を有せる自然人であつたのでございます。第二のダビデの子に就きましても、別に疑はありません。彼が王系に生れたといふことは多くの人々に認められて居つたのでございます。聖書に記して

「イエスエリコに近よれる時ある瞽者道の旁に坐して乞ひたりしが大衆の過ぐるを聞きて「此は何事ぞ」と云ひければ人々ナザレのイエスの過ぐるなりと告ぐ、瞽者呼ばはりて曰ひけるは「ダビデの裔よ我を憐みたまへ」

とありますが、一体彼は如何にしてキリストがダビデの子なりしかを悟たのでありませうか。又何故に「ナザレのイエスよ」と云はずして「ダビデの子よ」と呼んだのでありませうか。是れ瞽者なるものは往々普通人よりも鋭敏なる聽覺を有して、よく事物を了解するからであります。イエスはダビデの裔キリストでありまして、又神の生み給へる獨り子であります。キリストが神の子なりといふことは、最も重要なことでありまして、私共も亦或る意味に於ては神の子なりと云ふことが出來ますけれども、他の意味に於て主イエスは、完全に神性を受けたる神の子と稱ふべきものであります。其れ故に聖書にも「父その子を遣して世の救主となせり」とあります。キリストが神の子にして卓越せる性格を備へられましたことは、彼れが

普通人の樣に娶らず又嫁がずして、常に神を父と呼びしことにより
ても明かであります。又彼は吾等に敎へて「吾等の父よ」と神を呼
ばしめましたが、彼自ら「吾等の父よ」と云はれたことは福音書中
に見當りません、彼が昇天の節に「我は我が父即ち汝等の父に昇る」
と曰はれまして「我は我等の父に昇る」と云はなかつたは是れ實に
驚くべき事實でございます。キリストが神なる父に對する關係は唯
一無比であつたのでございます。約翰傳第十四章にピリポがイエス
に對して異樣なる否寧ろ普通なる質問をなして、
「主よ、我儕に父を示し給へ、然らば足れり」
と云はれたことが記されてありますが、ピリポは丁度私共が今日科
學上の說明又は證明を欲する樣に天父の存在及び其の性質の說明を
求めたのでございます。然るに主イエスは之に答へて

「ピリポ我かく久しく爾曹と偕にありしに汝は未だ我を識らざるか
我を見しものは父を見しなり何んぞ父を我儕に示はせといふや」
と申されましたが、之れは實に人間や天の使徒等の云ひ得ることで
はありません。「我れを見しものは父を見しなり」といふ語は、よく
私共にキリストは神の代表者にしてその自然人たる人格こそ異れ、
其の性質、性格に於ては正に其の父と同一であつたといふことを示
すものであります。
此れ等の驚くべき記錄は多く約翰傳中に記されてありますから、
キリストの人格の偉大なることを賞讃敬慕する人々でも、彼れの神
性を信ぜざるものは往々該書を以て後世人の添補せるものか又は是
れ全然聖ヨハネの書いたものでは無からうかなどゝ推測いたすので
あります。約翰福音書の眞僞に就きましては、過去四五十年の間に

種々の著述及び議論がありましたが、今年英國ユニテリアン派の一主領は内外の證據を蒐集して研究調査した結果、該福音書は全く使徒ヨハネの手に成つたことを明言して居ります。之れがユニテリアン一派に如何なる影響を與へますかは未だ分りませんが、言者は牛津大學教授ドラモンド氏でございます。氏はその舊師マチノウ博士及其の他の教授と見を異にして居りまして、其の歴史的研究より私共の所謂正教派に來加せるものでございます。

私共が約翰傳を讀みますときは使徒中又信徒中の最も氣に入られた最も親しかつた者の言葉を聞く樣な氣が致します。先づ開卷第一に「太初に道あり」と記してありますが、神は人類の生存以前に最早や自身を發表するの方便を有されて居つたのでございます、言語は思想を表はすものでありますから、私共の云ふことは即ち私共の思ふことであります。私が命令する時は口を以て命令いたしますが此の命令はやはり心から出るのであります。斯樣にしまして太初神の心中にはロゴス即ち言語があつたのでございます。此のロゴスは神と共に實在して居りまして、而も神そのものでありましたが、やがて其れが肉體の中に現はれたのであります。即ち聖ヨハネは

「我等その榮えを見るに實に父の生み給へる獨子の榮にして恩寵と眞理にて充てり」

と申されて居ります。

## 其の十三、全體から見た彼の使命

只今簡單にキリストの使命は果してどういふものであつたかといふ事を考へて見ませう。明らさまに申しましたならば惡魔の爲せる

罪過を打ち消して人間をして神が太初に歩ましめむとした道に向はせようとしたのでございます。此の罪を打ち消すと云ふことに就きまして、聖ヨハネは「神の子の顯はるゝは惡魔の工を毀たんが爲なり、」と申されましたが、直解すれば之を打ち消さんが爲めに來られたのであります。即ち呪詛を放たん爲でなくて、却て祝福を下さんが爲めに來られたのであります。創世記第十二章に「天下の諸の宗族汝によりて福禔を獲ん」とありますが、聖ヨハネは其の初めにやつた説教中に之を引用しまして、「神は汝等を罪より救ひて福禔せんが爲めにイエスを送れり」と説かれました。イエスの目的は明かに惡魔の爲せる罪惡を打ち消して、人間を柔順にすることでありました。然らば彼は如何にして之を果したのでありませうか。誰が其れを豫言することが出來ましたらうか。誰も出來なかつたのであります。

キリストの贖罪は先づ第一彼が肉体を以て生れて來たこと、第二は彼が十字架に懸けられて罪を負はれたこと、第三は死の羈絆から脱して復活したこと。第四は聖靈の働きによつて果されました、而して最後に彼は榮光の中に再來して總てを完成されるのでございます。

私共は今までにキリストの使命如何及び彼の齎した證據等に就いて研究して參りましたが、私は此れ故にキリストを信ずべき充分の理由があると思ひます。之れを信じないで他に代るべきものがありませうか。又如何なる論法で此等の證據を打破してキリストの救に疑を挿むことが出來ませうか。救を避けんとするものあらば之實に奇怪千萬であります。救世主から逃れて其の招きに應せざる程無感覺となることが出來るとすれば。是れ一層の不可思議であります。此は尚解決を要する一問題であると思ひます。

獨逸人の中には屢々全く神話ならなぞと申されたものがありますが、最近三四十年間の研究によりまして此の神話說は破壞されたのでございます。何となればキリスト時代は神話を生むべき時代ではありませんでした。故に新約全書が第一世紀の作物であつたことが明かになると同時に、此の神話說は破れたのでございます。實際神話などと云ふものは、或る者の云ふ如くさう簡單に案出されるものではありません。果して神話ならばキリストの使命も亦躓着では爲かつたのであります。私共は躓着といふ事を聞けば何時も何の爲めであるかを又何故であるかを尋ぬるのでありますが、誰れでも何等の目的なくして僞りの物語を作るものはありますまい。例へば樂をして金を儲けるとか、何とか目的はあるものです。然し光榮ある救世主の傳記を書いて金持になろうとする樣な者がありませうか若し出來た處が誰も其んな事を創作しようとするものはありません。一体詐欺瞞着などと云ふことには、理由の無いものでありますから、萬一斯ることをして福音書の一卷を創作し得た所が、其の實行はとても出來ないのでございませう。

福音書は互に眞理の聯圈をなすばかりでなく、又此れは基督敎が比較的幼稚な時代に記されたものでありますから、若しも瞞着的なるものでありましたならば、之れを信じ之れを證據だてた人々でも直に之を排斥したのでありませう。

さてキリストの使命及び其の證據が神話でもなく又瞞着でもないとすれば、諸君は到底其の眞實なることを信ぜざるを得ないのであります。即ちキリストは歷史上愛の神より出でたる救世主であり、まして、常に迷へる人類を救勸し、其の再來すべき榮光の日には私

共の期待する偉大なる事業を果されんとつゝあるのでございます。

私は此の世界最大の問題につきまして適切に之れが解釋を下すことは實に困難であると思ひます。併し乍ら此の簡單な綱領も亦私共が何故に信仰するか、又何物を信仰するか、何物を希望して居るかといふことを、一層明白にすべき助となることゝ信じます。

# 第四回　初代及び現代の基督教徒に對する聖靈の働き、

## 其の一、推論餘考

私が從前述べて參りました研究法を略言いたしますれば、先づ第一に自然界と人生とを觀察して自然界にも人生にも（諸君は人類を自然界の一部分とするか又は最も高尚なるものとするならんが）共に一種の高尚なる力と希望とが有ることを認めて參りました。若し私共人類が人間以上の者を啓示する所の位置にあるものとしましたならば。私共の目前に横はつて居る大問題も正しく論議することが出來るのでありませう。實に自然界は神を秘し人生は之れを啓示するのでございます。第二に聖書は其の筆者自身も恐らく知らなかつ

たでせうが、終始一貫せる希望を抱ける古今無類の叢書でございまして、舊約全書は救世主の將に來らんとすることを頻りに敎へ、新約全書は其の救世主が來りて如何なる事業をなし如何なる結果を及ぼしましたかを敎へてあるのを見て參りました。第三は私はキリスト自身の使命を此の宗敎研究の對照といたしまして、キリスト時代の人々と共に彼の位置、彼の證據を考へて參りました。此等の三事實が互に相關聯して居りますのは實に驚くべき事實であります。自然は人智を借りて神を示し、聖書は恰も神より示されたる如くにキリストの降臨、舊約の充實及び彼の救世主なることを示してあります。舊約全書は罪の性質を敎へキリストは救の道を敎へまして、眞に世の救主であると云ふことがわかりました。

## 其の二、聖靈の約束

四福音書中何れにも洗禮のヨハネが主イエスキリストは聖靈を以て洗禮を施す者であるといふことを唱道して居ります。之れは注意すべき事實でありまして、其の當時の人は何人も斯ることが事實とならうとは信じなかつたのでございますが、ヨハネは固く斷言したのであります。キリストは「活ける水」又は「活ける泉」といふが如き言葉を以て幾度も聖靈の降臨を說きましたが、彼の布敎中には斯樣なことが無かつたのでありますけれども、彼れは自ら其の爲すべきことを知つて居つたのに相違はございません。彼れの復活後四十日間のうちに聖靈が降りさうなものでありましたが、是れ亦降りませんでした。さりながら主は確かに之れに留意されて復活後使徒

等に聖靈の降臨を示されようとする如くに、「汝等はエルサレムを離れず我れに聞ける所の父の約束を（即ち汝等は久しからずして云々）を待つべし」と云はれたのでございます。

## 其の三、ペンテコステの恩惠

ペンテコステは收獲節の大祭でありまして、初穂の奉納後七週間目の節莚でございましたが、此の大儀に準じましてキリスト復活（或る意味に於ける初穂）後七週間目に聖靈の降臨がありました。之れは所謂基督教の收獲の初穂を示すものでございます。當日の大恩惠を研究致します折りに、吾々は多く其の外觀のみを見まして其の内容を觀過し易いのでございますが、使徒等の語つた種々の方言などよりも、彼等が如何なる事を云つたかを究めることは尙一層必要なことであると思ひます。使徒等は何事を語つたのでございませうか。彼等は神の驚くべき偉業に就いて宣傳したのでございます。彼等に斯る方言を語らしめたのは是れ明かに一の休徵でございまして、其の内心に何物か注入されたに相違はありません。そは果して何物でありましたらうか、概括して申上げますれば、感應及び勢力の二作用であります。即ちキリストは外部より、聖靈は内部より、共に彼等の心中に入つたのでございます。私共が此の四回講演に各々異なつた材料を有してゐることは、是れ實に興味あることであります。第一には宇宙を包含する自然界といふ大書籍、第二には諸君の掌中にも入れらるべき聖書、第三には肉体を受けて同時代の人々と親しく接觸した神人、第四には私共が生理的には感觸することが出來ませんが、常に私共の心中を宿として私共に靈感と力とを與へ、自ら

神聖なる靈、光なる靈、力なる靈、なることを現はす聖靈であるまして、之れは人の靈と融合するものでありますが、如何に融合するかは信者と雖ども之れを說明することが出來ないのであります。之れはペンテコステの日に初めて起つた事實でありまして、全世界中他の宗敎には全く類の無いものであります。

## 其の四、使徒の說敎

先づ第一に聖靈降臨の直接結果を考へて見ますならば、恐らく當時の人々の注意を引いたものは使徒等の說敎でありましたらうと思ひます。ペンテコステの朝從來は別に何等の敎育も受けず、又其の名も知られなかつた此等の十二人は一所に集まつて居つたか、又は三々伍々數ヶ所に分れて居りましたかは存じませんが、兎に角所々方々より蟻集いたしました多くのユダヤ人の中に立つて、何事か宣傳し初めたのでございます。彼等は丁度天上の君主より遣られた大使の樣でございました。私は重ねて申し上げますが、彼等は何事を宣傳したのでありませうか、是れ甚だ大切な問題でございます。其の第一は彼等がキリストの證人となつたことであります。即ち彼等幾千の聽衆の中には親しくキリストに接見したるものも、又其の說敎を聞いたものも、又其の祝福を求めた人々も澤山ございましたらうが、其の同じキリストは十字架に釘られて死に、神の力によつて死から蘇りました。此の明かなる事實に就いて彼等は爭ふて、「吾等は皆その證人なり」と述べたのでございます。諸君は何人もキリストの死から蘇るのを見たものが、無かつたと云ふことを御記憶でございませう。併し使徒等は皆其の復活後彼を見たのでございます。

是れ復活の性質として何人も之れを見ることが出來なかつたのでございます。故に「吾等はキリストの復活後共に食ひ共に飲めり」と申されたのでございます。第二にキリストの昇天及び聖靈の降臨に就いて述べたのであります。即ち「神その子を崇めて之れを高きに擧げたれば、彼れは高きに居りて汝等が今見るところ聞くところのものを注げり」と申されました。其れ故に聖靈によつて爲されました事實は、是れ亦キリストの使命如何を證するものでありまして、私共はキリストが吾々に對して直接にもたらした使命と吾々の心中に宿つてゐる靈を通じての使命とを區別することが出來ないのであります。第三には舊約全書に記されてはありますけれども、未だ充分に果されなかつた希望に就いて宜べたのであります。何となれば其の大部分はキリストの降誕、死亡、復活、昇天等によりまして果されましたけれども、まだ完全に果されない多くの殘部があつたからであります。又使徒等は簡單に而も權威を持つてキリストの暫く在天せらるべきこと、及び再び地上に降臨せらるべきことを宜べました。

此等のことは彼等最初の說教の主要なる點でございましたが、諸君は何人か其の當時次ぎの如き質問を試みたであらうと御考へになることも出來ます。即ち、

「若し私共の主が死より蘇つて昇天し、更に再び地上に來るものとするならば、何故に死するの必要があつたのでございませうか。後年に至つて死なれたならば、却つて斯る不合理なる死を避けることが出來たのではありませんか。何故に其の使命を果して然る後に天に昇らなかつたか、又天に昇る前に何故地下に入つたか、

何故に十字架の苦みを受けられたか、又靈肉を烈しき苦痛の中に分つて、何故天父に其の靈の受けられんことを願つたのでございませうか。」

右の如くであります。其れ故に使徒等の說敎の中にはキリストの死を說明するのに舊約全書の一部分を引用したものがあつたのでございます。

今私は之れに就きまして、使徒行傳第八章を引照しようと思ひます。即ち該章にピリポが召されてエテオピアの寺人の車に參りました時に、寺人は丁度舊約の最大篇にして私共の主の苦みと復活を豫言せる以賽西書第五十三章を讀んで居りましたが、ピリポは其の車に同乘して道すがら其の記されたる所に基いてイエスの福音を宣べ傳へたと云ふことが記されてあります。

蓋し事實としてのキリストの復活、昇天、聖靈の降臨、未來に於けるキリストの再來、舊約聖書と對照した十字架上のキリスト等は、當時使徒等の說敎の主要な題目でございまして、最も著しくエルサレムの人々の注意を惹いたのでございませう。

## 其の五、新生涯

次ぎに注意すべきことは、基督敎によつて人々の生涯に大變動を來したことであります。此等の人々は啻に基督敎を信じて其の宣傳を始めたばかりでなく、未だ曾て有せなかつた新生命を有つ樣になつたのであります。

「人キリストにある時は新に作られたるものなり、舊は去りてみな新しく作るなり」と記されてありますが、

是れ實に偉大なる變化であります。私はかの三千の人々がキリストを信じて其の生涯に大變化を起したことを見たかつたのでございます。此の新生命は速かに成長しまして、生活には愛を本旨とし、愛は施しを實行する樣になつたのであります。其れ故に基督信者は愛の精神に於て一致合体し、其の持てるものを好んで人に施し、そしてその精神を實現したのであります。私共は屢々「財囊は私共がキリストに對する愛の度を自ら指示する所の寒暖計である」などゝ申しますが、其の當時の寒暖計は果して何度を示して居つたのでございませうか。蓋し其の熱度は非常なもので、人々は「心を熱くして主に事へ」て居つたのでございます。でありますから初代の基督信者の感情や精神のうちに起つた偉大なる變化といふものは、到底今日の人の經驗では想像が出來ないだらうと思はれます。

新生涯に入つて間もなく來るものは忍耐であります。之れは諸君が精密なる觀察者でありまして、其の後尙數年間生存せられましたならば、必ず目擊せられたことと思ひます。實にキリストの云はれた如くに反對者は忽ちにして起つたのであります。即ち「刀を持たざるものは衣服を賣つて之を買ふべし」と云はれましたが、之れは「汝等我が爲めに反對者迫害者に對して用意せざるべからず」といふ意味でございます。當時反對は先づ第一にサドカイ宗徒から起りました。次ぎてパリサイ宗徒も亦信仰によつて清められるといふ敎義に反對いたしました。又續いてはカイザルを信じて居た羅馬人さへも口を出す樣になつたのであります。かやうに初代基督敎は實に砲烟彈雨の間を奮鬪したのであります。若し人々にしてキリストを迫害いたしましたならば、又同時に基督信者をも迫害しようとしたの

であります。故にキリストは曾て申されました。「世汝等を惡むとも驚くこと勿れ彼等は汝等よりも早く我を憎めり」。實に其の通りと爲つたのでございます。

## 其の六、ペテロに就きて

使徒等の心中に來した變化は實に傳道布敎せんが爲めに生存し、愛せんが爲めに忍耐する樣になつたといふことは明かなことであります。而して之れが彼等の旗標となり、又キリストの使命に對する聖靈の證據となつたことと思ひます。併し私は今少しく之れを精細に研究せん爲めに、天國の福音がペテロ及びパウロの二人に如何なる結果を及ぼしたかを述べて見ようと思ひます。先づペテロから申し上げますならば、諸君は馬太傳第十六章に於てペテロがキリストを非難したことを御讀みになつたのでございませう。之れは何の爲めでございましたらうか、即ちキリストが罪人の手によつて十字架上の苦痛を受けようとしたに對して「主よ、宜からず此の事汝に來るまじ」と云つたことであります。私共は聖マタイが公平に之れを記されたことを謝するものであります。彼れが尙記して曰ふには「イエス顧みてペテロに曰ひたまひけるは、サタンよ我が後に退け」とあります。私は重ねてマタイの公平正直なるを謝するのであります。此れによればペテロは明かに其の當時キリストが十字架に釘けられて血を流し、そして私共の罪を贖はれると云ふ敎義を疑つて居つたのでございます。次ぎにペテロ自身の書きました第一の書簡を見ますならば、

蓋汝等贖はれて先祖より傳はれる徒しき行より離れしは、銀や金

の如き壞る物に由るに非ず。疵なく汚なき羔の如きキリストの實血に由れることを知ればなり。

とありますがペテロの心中にも斯る大變化があつたのでございます。

又馬太傳二十六章に

「ペテロ庭に座り居ける時或る婢來りて汝もガリラヤのイエスと偕なりと曰ひければ、ペテロ凡ての人の前に此の言を肯がはずして我汝が曰ふ處を知らずと曰へり。出でゝ門口に至れる時、又他の婢之れを見て其所に居るものに云ひけるは、此の人もナザレのイエスと偕に在りし。ペテロまた肯はずして誓ふ、我この人を知らず」

と記されてあります。又聖靈によつて洗禮を受けてから七週間後にペテロは國内の名士及び議會の前に立つて、「我等は人に事ふるよりも先づ神に事へざるべからず」と斷言いたしました。是れ實にペテロの心中に起つた大變化ではありませんか。之れは實に道德的奇蹟でありまして、又同時に超人的の効果を及ぼしたものと云はなければなりません。若しキリストの肉体が尙地下に埋れてあつたならば、斯ることは斷じて起らなかつたと私は信じて居ります。人はよくローマの詩人ホレースの言を借りて「恐らくユダヤ人はそれを信ずることが出來ませうが私は出來ません」と申します、若しキリストが尙地下に死して居つてペテロに斯くの如き（彼の書簡及び使徒行傳に記されたる）變化があつたといふ樣な愚説を信ずるものがあるならば、其れは其の人の勝手でございます。

## 其の七、パウロに就きて

使徒行傳第九章の初めに記されてあるパウロと同章の終りに錄されてあるパウロとを比較してごらんなさい。初めに彼は基督信者を迫害しようとして、烈火の如く又狂氣の如くなつて、ダマスコに向つたのに、其の章の終りには彼が熱心なる信者となつて、一身をイエスに捧げ、今まで忌み嫌つて居つた基督教の爲めに水火も辭せずと云ふ決心をしたのではありませんか。是れ實に驚くべきことであります。此の事に就いては多くの人々が論議いたしました。前のトルストルトン公も之れに就いて一小冊子を公にせられて居ります。公はもと信仰なきものでありましたが、パウロの研究後信者となつて、最早や福音書に反對しない樣になつたさうでございます。之れは其の證據が確實であるからであります。又故ハーマンメリヴェール氏は、其の著「歷史研究」中にパウロを叙述して、キリスト復活の大奇蹟はパウロの傳道と其の生涯によつて益々著しくなつたと云ふことを說明されてあります。

**其の八、基督教會の建設**

諸所に小教會が建設せられましたことによつて、福音傳道に急速なる効果があつたと云ふことが解りますが、私は今其れに就いて一例をあげようと思ひます。即ちテサロニケの教會でございます。福音傳道が僅々數週間で以て偉大なる効果を多數の人々に及ぼしたことは、使徒パウロがテサロニケ人に贈つた書簡中に最も詳かに出て居りますが、之れは人々が福音を聞いてから間もなく書かれたものでございます。

## 其の九、福音と羅馬帝國

基督教福音が羅馬帝國に及ぼした効果如何は、是れ頗る大なる問題でありますが、私は只此所に其の概畧を述べて見ようと思ひます。此の問題につきまして、「は嘗てミルマン及びメリヴェール兩氏の詳論がございました。私は此所に「學生用ギボン」、即ちギボン氏の羅馬興亡史を持つて居りますが、之れ實に偉大なる歴史書であります。ギボン氏は私共の所謂熱心なる信者ではありませんでしたが、彼れは實に價値ある證據を擧げて居ります。彼れは次ぎの樣に記して居ります。

然るに羅馬帝國は陽に外敵の襲來を受け、陰に道德の腐敗を釀し加ふるに清淨卑近なる宗教の傳道を受けて、巧みに人心を收攬せられ、暗々裏に新勢力を布植せられて、終に帝都の廢址に高く十字の凱旋旗を掲げらるゝに至れり。

之れは氏が基督教に筆を着けた第一歩でありまして、實に卓見でございます。プリニーやタシタスの著述に於ても幾多の難問題が解決せられて居ります。羅馬史家中の偉人タシタスは其の年代記（十五—四十四）にローマの大火災に就いて記して居りますが、諸君は皆其の話を御存じであらうと思ひます、が其の物語の多くは今日兎角の非難があるのであります。私は此の物語中にあるネロ皇帝が大火災中に琴を彈じて居つたと云ふことが、偽か眞か知りませんが、タシタスの説によりますと人民がネロの放火したことを彈劾いたしました所が、ネロは當時「惡事を爲すが故に人々から嫌はれた一團即ち基督信者」に其の嫌疑をかけた」と云ふことであります。ネロが斯

樣に基督信者を迫害いたしました年代は、使徒行傳の終の年代の翌々年、即ち紀元六十四年の事でございまして、パウロの死後僅に一年位でありました。タシタスは尙進んで基督信者の如何なるものなるかを記してあります。

チベリウス帝の代にキリスト此の宗派を開基したるが、彼はポンテオ、ピラトによりて死刑に處せられ、かくて凶惡なる迷信も暫時抑制せられたれども、再發して其の禍の根源たるユダヤは申すに及ばず、ローマ市中にも傳播し、殘忍誹謗盛に行はれたり。當初は逮捕されしものゝみ其の信仰を告白したれども、後には多くの人々發覺せられて皆所罰せられたり。是れ市中に放火せるが故にあらずして、彼等が人道に反せるが故なり。其の捕はれたるものは或は嘲弄侮蔑の渦中に晒され或は身を野獸の毛皮に包まれて寸斷せられ、或は十字架に釘けられ、或は身に燃料を塗られて夜中の燈火となりて燒き殺されたり。ネロは斯る光景を演ずる爲めに自ら其の庭園を貸し與へたりしなり。

或る基督敎反對者の說によりますと、此の殘酷なる事件はパウロがローマに滯在して居りました一年內に演ぜられたと云ふことであります。何と云ふ恐ろしい史蹟でございませうか、幾千の信徒は斯る寃罪を被りましたが、キリストの爲めには從容として此の恐ろしい死をも敢て辭せなかつたのであります。

尙ほ歷史を迚つて紀元凡そ三百年頃になりますとデヲクレチアンの世となりますが、帝も亦非常なる迫害者でありまして、命令を發して聖書を燒き敎會を破壞させて基督敎といふ名目を消滅させてしまひました。然るに其の後二十五年たちますと、コンスタンチン大

帝の代となりました。大帝は總て此れ等の迫害を除かれまして各信徒に最大の自由を與へられた計りでなく、其の崩ぜられようと致しました時も、自ら基督信徒であるといふことを告白せられたのであります。實に大なる變化ではありませんか。其の後も種々の成敗を經まして今日の進歩を來したのでございます。

## 其の十、特長ある基督教々義

最初の基督信者から傳へられた教義といふものは、どんなものでありましたらうか。キリストは何時も第一に又眞先きに引合に出されたのであります。だから何んな人でも餘事はさておき先づキリストを知らなければならなかつたのであります。即ちキリストの御性格が始終引き出されたのでございます。キリストの御性格は吾々の祖先や諸國の祖先が有つて居つた樣な頑固で復讐的のものではありませんでした。温順、忍耐、愛、柔和、良心、清淨、誠實といふ樣な人間の性格中で最も優さしい性格を備へられて居つたのでございます。だから此の世に居られた間は勿論のこと、十字架にかけられました時ですらも、

父よ、彼等を許したまへ、彼等はその爲す所を知らざればなりと仰せられたのでございます。

## 其の十一、キリスト現今の勢力

之れまで申し上げて參りましたのは皆な昔のことでございましたが、私は之れから進んで現今のキリストに就いて申上げようと存じます。有り難いことには聖靈の證據といふものは今日でも尙ほ聞く

ことが出來ますから、キリストの力は生きて居る存在であるといふことが解ります。でありますから此の點だけは別に使徒行傳やパウロの書、及び初代教會の記錄にばかり依賴しなくてもよいのであります。「キリストは我等の中に在りて榮の望みなり」と云ふ詞は、パウロ時代に基督教を示す手短かな方法でありましたが、今日でも矢張り其の通りであります。其の贖罪的の勢力は今日も尙ほ盛んに行はれて居りまして、基督信者の心の中には何時もキリストが居られるのであります。丁度此の室に日光が入つてくると同じ樣に擧げられて、天に昇りました救主は靈によつて人の心に入つて來られるのであります。でありますから基督信者はキリストに同化して、從つてキリストの道を歩む樣になるのでございます。

勿論基督教だからといつて決して蒸氣轆碎器の樣に來るものを何でも皆んな壓しつぶして平くする樣な器械力ではありません。矢張り條件がありますから其れを受け納れて信仰しなければ駄目であります。神は其の子を遣はされて迷へる羊を求むる羊牧者となし、救主となし、罪の贖主となし、死して天に昇らしめようといふ使命を下されたのであります。而して此の使命が受け取られます時には、精神的道德の槓竿となつて神をも動かすことが出來るのでございます。醫學上の語を借りて申せば之れは私共の要求に應ずべき補益劑となるのでありまして、即ち救ひであります。此の救ひは提出されて好機會が與へられました。若し此れを捕へませんならば其れは非常な損であります。併し基督教は決して强制的のものではありませんから、諸君は人を無理やりに信者とならしめることは出來ません。私共は人と共に鍋を削つて議論いたしますが只議論丈けでは其の人

を信者とすることは出來ません。基督教に入ることは即ちキリストに服從することでありまして、此れは心の中から起る現象でございます。私は人と語る時に一生懸命で話しても、時々石地藏に話して居る樣に感じたことがありますが、斯樣な時には自分の力以上の力が必要でありまして、而も其の力に服從させるといふことが無ければなりません。

世の中には色々の基督信者がございますが、之れ等の人々は必ずしも同一の徑路を踏んで眞の信者となるものではありません。或る者は必要を感じて之れをキリストに滿して貰はうとし、或る者は赦しを願つて之れをキリストに赦されようとし、又或る者は無能力であることを感じて高き理想に導かれようとするのであります。グラスゴウ大學の故ドラモンド教授は曾て私に次の樣な話をされたことがあります。

「世の中には罪の赦しを得ようとしてキリストに來るものよりも、力を得ようとして來るものが遙に多くあります。併し彼等が一度キリストに來て見ると罪の恐ろしいことが解つて參りまして、終には自ら赦罪の必要を感ずる樣になります」。

と、斯樣に私共がキリストに來る道は種々でございます。或る者は彼に觸れようとして來ますが、或る者は意外にもキリストから接觸されるのであります。

福音書は明かに其の事業の完成を期するものでありますから、救といふものは最初に與へられて、而して日常の生活に活用せられなければならないのであります。基督信者は此の意味に於て各自の救を活動させなければなりません。新約全書は之れを明示して居りま

す。又私共は之れを內的及び外的生命の變化として感ずるのであります。即ち暗黑から光明に、束縛から自由に、我儘から愛に至る移轉でございます。佛國の或る婦人が昨年小さい書物を手にして近所を走せ廻り乍ら、「私は神を見つけました」と云つて歩いたさうですが、彼女は從來神の名はよく知つて居りましたが、其の日までは神を見たことが無かつたのであります。其の小さい書物の中には主イエスに就いて何事か記されてありましたのですが、彼女は其の何物なるかも知らないで、「私は神を見つけました」と叫び廻つて近所の人にも來て見る樣に云つたのでございます。之れは今日信ずべき證據の一例でありますが、私は只今よし時間と事情が許しても、此の講堂を出て諸君がキリストを發見なさつた方法及び如何にしてキリストが諸君を發見したまふたか、又彼が諸君の心靈に對して如何に實在的でありますかを答へ得る人々を尋ねて彼等に聞いて見ようといふ必要もないのでありますが、畢竟するに各個人の證據といふものは大なる力あるものであります。即ち基督教に於ける經驗は科學に於ける實驗と同樣なものでございます。經驗とは味つたり取つたり、見たりすることであります、私共は「味ひて見よ」と申します。又私共は九千萬哩以上も隔つた物を見ることが出來ますけれども、總て物を味はうとするには少くとも之に舌を觸れなければなりません。でありますから私共がキリストを味つて其の有難さを知るには、彼が最も近く私共に近づかなければならんのであります。

## 其の十二、得らるべき例

今門外一歩を踏み出して罪に惱める男女がキリストに救はれた實

例を集めて來ることは、誠に容易いことでありません。先づ市中傳道館へ參りまして主事から宣教師に紹介してもらひましたら、多くの實例を聞くことが出來ませう。若し其れで不滿足なら其の宣教師に頼んで眞實に悔ゐ改めた二三の人々に紹介してもらひましたならば、其れこそ活きた話が聞かれるでありませう。又傳道局の月刊雜誌を見ましても暗に迷へるものが主にたよつて光明の道を歩んで居るといふ樣な信ずべき信仰談が載つて居るではありませんか。私は次ぎの樣に記されてある哥林多書の句を時々思ひ出すのであります。

「汝等のうち以前には此の如きものありしかど、主イエスの名により、且つ我等の神の靈に困りて洗滌又潔り又義と爲ることを得たり」。

之れが即ち基督教でありまして、又キリストの信仰せらるべきものであることを示すのであります。

次ぎに私が極く近頃聞いた話でありますが、或る日本の紳士が國法に觸れて七年間の禁錮を受けたさうであります。此の人は基督教が大嫌ひで極力之れに反對して居つたさうですが、入獄中に其の妻が基督信者となつたさうでございます。どういふ事情で信者となつたかといふことは、此處に申し上げる必要はありませんが、或る時妻が監獄に行つて夫に面會をした折りに之れを話しますと、夫は烈火のやうに怒つて大變その妻を責めたさうでございます。所が此の報知が一度ロンドンに參りますと、郊外に住んで居りました一婦人が非常に此の話に興味を起して、かの日本人夫婦とは何の關係もなく赤の他人でありましたのに其の日から毎日彼等の爲めに祈禱することを決心して、とうとう四年間倦まずに續けたさうであります。

斯ういふ事が基督教の全部ではありませんが、「薪磨は務めなり」といふ考を以て務めたのでございます。之れは唯の娯樂ではありません修業であります。精神を献げ時間を献げて祈ること四年が間で終に先頃驚くべき報知に接したのであります。聖書は終にかの日本紳士の手に入りました。而して讀むに從つて彼れの精神が開かれまして、間もなく其の光明に照されたといふことであります。彼れは其の靈的變化を述べて、「其れは丁度醫者の手の樣に私に觸れまして、私の道德的の病氣を治ほしました」と申しましたが、之れが即ち救であります。何者の手に觸れられたのでせうか、諸君は疑を挿むことが出來ますが、之れは即ち救世主が其の救の手を彼れに觸れたのでございます。若し私共が只今彼れを訪問して尋ねて見ましたならば、「キリストを信仰するかと御云ひですか。勿論私は信じて居りまします。キリストほど有難いものはありません。又聖書の言葉は空の皇の樣でございます」と云はれるに違ひはありません。（氏は明治三十七年八月出獄後基督教の事業に携はつてゐる）斯ういふのが即ち活きて居る證據でございます。又私は過去の物語もよく讀んだり聞いたりしますが、之れも亦必要なものでありまして、私共の精神の働きの基礎となるものでございます。併し乍ら又私共人間の精神中には永久に流れて居る泉の樣なものがありまして、絶えずキリストに似た性格を湛へて居るものでございます。

## 其の十三、外國傳道事業

基督教を弘める爲めに外國へ參りまして、其の土地の人々に傳道をする事業に就いて一言いたしませう。勿論一例を擧げて他は御推

察に任せる積りでございます。つひ數年前のことでありましたが、亞弗利加内地の傳道家として有名なロイド氏は、矮人の住居する森林地方へ參りまして、是非その人種を見附けようと致しました。或日の事氏はその携帶してゐる獵銃を取り上げまして、樹の上に戯れて居りました猿を射撃しようと致しました所が、一緒に參りました子供の一人が、「あれは人ですから御射ちなさるな」と云ひましたから、氏は非常に驚いて銃を下ろしたさうでございます。夫れから少し經つて氏は一寸とした空地へ參りますと、案内者が申すのには此の邊が一番矮人の多く居るところでございますと云ひますから、見廻して見ますと成る程周圍にある低い樹の枝々には、隨分澤山の矮人が居つたのでございます。案内者が云ふのには、之れ等の矮人は皆手に弓と毒を塗つてある矢とを持つて居ますから極く靜かにする樣にといふことでありました。そこで氏は其の空地の眞中に腰を下ろしてウガンダ語なら多少は彼等にも解るだらうと思つて、大きな聲で「御機嫌はいかゞですか。」又は「平和」と云ふ意味の挨拶を致しましたが、何とも返事もなければ又別に變つたこともありませんでした。夫れから暫く待つて居ましたが、矢張り返事がありません。氏が第三回目の挨拶をすると一方の叢を押しわけて一人の一寸法師が出て參りました。手には矢張り弓と矢とを持つて居ります。敎會宣敎師本部の一員たる氏は極めて親しげに言葉をかけ乍ら手を伸しますと、此の種族の酋長たる彼は元氣を出して前進して、終に握手の禮を交はしたそうでございます。諸君も此の話によつて如何いふ風に基督敎が他人種の間に普及されて居るかゝ御解りになりましたでございませう。此れ等の矮人人種中には最早や充分に訓練されま

して、彼等同人種に對する宣教師となつて居るものもあるそうでございます。昨日と今日の差は實に大したものではありませんか。

同じ樣な話は隨分澤山ございます。私は今日此處へ參りまず途中で、キリストの事業がどの邊まで行はれて居るかを考へて見ました。先づ北極地方に出かけたペック氏や、南米の森林地に居る宣教師や、ニユウギニアに布教された故サヤルマー氏や、フヒジー島に行つたキャルヴアート氏や、アネイテウムに於けるペイトン氏や、モンゴリアのギルモア氏や、其の他の開拓者に就いて考へましたが、一体何者が彼等を派遣したのでございませうか。名譽ですか、金ですか。或は又博物學上の穿鑿の爲でせうか。或は鑛山事業の爲でせうか。否々決して斯るものゝ爲めではありません。全く溢るゝ所の愛の爲めです。彼等は先づ行きて異鄕の人々に其の善を行はなければ止まないのであります。或人は之れを愛他主義と申しますが、此れは基督教といふ立派な名前を持つて元から持つて居るのでございます。「汝等キリストイエスの心を以て心とすべし」と記されてあります通りに、單に自分自身のことにのみ屈托しないで、進んで他人の利益を謀る樣にならなければなりません。之れが即ち基督教の本義でありまして、私共を愛し私共の爲めに其の身を献げて下さつて主イエスを眞似ることでございます。

## 其の十四、内地事業

先年ロアリングブレース氏が「キリストの事業或は人道の進歩」と云ふ頗る面白い書物を著されましたが、此の人道の進歩と申しますことは毎日私共の間に行はれて居る事實でございます。數日前に

ストランド街が雜踏の爲めに全く閉塞されましたが、一体何の爲めでありましたらうか。之れは電信局員が基督教の電信局員集會に出席したからでございます。又數日經つて再び該の市街の雜踏がありましたが、之れも全國から集つて參りました鐵道雇員が彼等の爲めに開かれた基督教の特別の集會に出席したからでありませう。つひ二三日前には數千の支部を有する基督教青年會の六十年祭がありました。又今晩（千九百四年五月二日）貧民學校の六十年祭が擧行されるではありませんか。此等は即ち聖靈の働いて居る有樣でございます。尙ほ郵便集配人、警察官吏、軍人、海員、工女等の修養、平安を謀る爲めに經營せられました幾多の說備がございまして、基督教は死ぬ所か未曾有の活動をして居ります。今や各國の人心は將に基督教の勢力によりまして互に融合しようとして居るのでございます。

此等は私の所謂活きて歩いて居る證據であると云ふのでございます。而して其れが今日まで研究して參りました多數の證據と一になつて、更に有力なものと爲つて居るのを諸君も御認めになつたことゝ思ひます。併し勿論まだ澤山の問題が解決せられずに殘つて居るのであります。信じなければならない人々が信仰せず、又高尙な生涯を送らなければならない人々が高尙な生涯にはいらないから、まだ〳〵誰も解決の出來ない智識や道德の問題が澤山あるのであります。此等の難問題に就きましては信仰のない人の方が却つて信者よりも多く煩悶して居るのでございまして、其の難問題が多くなるに從つて、其の論據が又一層困難となることゝ私は信じます。

榮光に滿ちたるキリストが再來せられまして、私共に現はるゝ日

こそキリストの最大證據が私共の前に示される時であると私は思ひます。此の光榮ある未來を語り得る人は實に幸福な人でありまして、其の日には主イエスが最高の權威を以て私共に現はれまして、神の總ての目的が明かになるのでございませう。

## 其の十五、決論

今や私は此の講演を終らなければなりません。私は只今まで諸君の記憶や諸君の思想を大に疲勞させましたと思ひますが、併し此れ等の事柄に御注意下さることは實に必要なことでありまして、充分研究の價値があることゝ思ひます。私は只門を開いた丈けでございますから、諸君は之れから御はいりになつて能く御研究になることが大切であります。私共は益々神に就いて正確な考を得、又從來よりも一層明かに自然界より又人間界によつて神を認め、聖書をば尚ほ隈なく探つて見たいものでございます。敬虔な心を以てキリストを研究し、出來る丈け他人の心中に働いて居る聖靈を探つて見て、終ひには私共の內心にある聖靈の働きをして、益々盛にならしめたいものでございます。畢竟するに基督信者の生涯は基督教の何よりの證據でございます。今日私共の周圍には愛と犧牲と純潔にして忠實な心を以つてキリストに導かれ得る幾多の青年があるではございませんか。

神よ吾々にも斯くの如き精神を與へて生涯主のために働かんとすることを許したまへ。

明治四十三年六月五日印刷
明治四十三年六月十八日發行

（定價 上製金四十錢 並製金三十錢）

大阪市東區清水谷東町四二〇
翻譯者 川崎市藏
東京市芝區高輪北町三十番地
發行者 イ、ライアソン
東京市京橋區木挽町二丁目十三番地
印刷者 佐藤保太郎
東京市京橋區木挽町二丁目十三番地
印刷所 中屋商店活版部
東京市神田區小川町一番地
發行所 普光社
神戸市中山手通り三丁目五番地
販賣所 日本聖公會出版社

版權所有

長老小林神學士改譯

# 福音の道

**MASON—The Faith of the Gospel.** Translated by Rev. J. H. KOBAYASHI.

Price Cloth .75. Postage .08.

本書は一時絶版の姿なりしが今回各地諸彦の希望に基き再版すると共に舊版に比して一層平易に改譯されたるものなり、

總クロース
定價金七拾五錢
郵稅金八錢

細貝邦太郎譯

# 基督教師父傳

**PERRY—The Christian Fathers.** Translated by K. HOSOGAI.

Price Cloth .40. Postage .04.

師父の生涯は教會の花なり師父の殉教は信仰の實なり、見よ古代の師父等は其の信仰を固持するために如何に困阨に逢ひしかを、猛獸の爪牙あり焰々たる烈火あり而かも孤節を全ふして千載の下餘香の芳しきあり一讀して信仰の熱度を高め再讀して愈々卷を掩ふ能はざらしむ

四六版百五十頁クロース
定價金四拾錢
郵稅金四錢

エー、エフ、キング著

# 基督の全聖公會に於ける日本聖公會の地位

**The Nippon Seikokai in its Relationship to other Christian Bodies in Japan.** By Rev. A. F. KING, M.A. Price .05. Postage .02.

定價金五錢
郵稅金貳錢

長老小林神學士譯

聖公會叢書 神學第壹卷

# 基督教徒の品性

**ILLINGWORTH—Christian Character.** Translated by Rev. J. H. KOBAYASHI.

Cloth .30. Postage .04.

四六版總クロース
定價金參拾錢
郵稅金四錢

稲垣陽一郎譯

聖公會叢書 神學第貳卷

# 新神學と舊宗教

**S. GORE—New Theology and Old Religion.** Translated by Rev. Y. INAGAKI.

Price .65. Postage .08.

菊版總クロース百五十頁
定價金六拾五錢
郵稅金八錢

宍倉文學士譯

聖公會叢書 神學第參卷

## 神の內住

ILLINGWORTH—Divine Immanence. Translated by T. SHISHIKURA, M.A.

Price Paper .60 Cloth .75. Postage .08

定價 上製金七拾五錢 並製金六拾錢 郵税金八錢

バチエラー、オブ、アーツ エル、チー エー チ 岩井順一譯

聖公會叢書 神學第四卷

## 舊約聖書之眞價

定價金七拾錢 郵税金八錢

S. KIRKPATRICK—The Divine Library of the Old Testament.

Translated by Rev. D. J. IWAI, B.A., L.TH. Price .70. Postage .08.

宍倉文學士譯

聖公會叢書 神學第五卷

## 神と人との人格論

印刷中 近刊

ILLINGWORTH—Personality Human and Divine.

Translated by K. T. SHISHIKURA, M.A.

ミス、バラード俗解

再版

## 通俗創世紀

定價金拾錢 郵税金貳錢

BALLARD—Selected Portions of the Old Testament in Colloquial,—Genesis.

Price .10. Postage .02.

宍倉文學士譯

## 復活の證

定價金拾錢 郵税金貳錢

BULL—Evidences of the Resurrection. Translated by T. SHISHIKURA, M.A.

Price .10. Postage .02.

リドン博士著、執事島田弟丸譯

## 死後最初の五分間

定價金五錢 郵税金貳錢

LIDDON—The First Five Minutes after Death. Translated by Rev. O. SHIMADA.

Price .05. Postage .02.

加奈太監督デビド、ウキリアムス著 ヒユーロン長老イーライアソン編 執事榊原彌譯

## 聖公會之立脚點

定價金參錢

What the Church Stands for. Price .03.

21119

電車のたとへ
Parable of the Electric Trams. Price .03.
定價金參錢

日々のいのり
Daily Prayers. Price .015
定價金壹錢五厘

日々の掟
Rule of Daily Life. Price .015
定價金壹錢五厘

陪餐用祈禱
Devotions during Holy Communion. Price .02.
定價金貳錢

子供の祈
Childrens Prayers. Price .03.
定價金參錢

325
114

020459-000-4

325-114

基督教信仰論

アール・ビー・ガードルストーン／著

M43

ABI-0269